

寂上義光物語

全

K289  
M10





一某と七代家上七家には結びりて義後之若年ノ家事本  
不私にて松板備守御公儀ハ捧所忙山空處太文院延  
越前守即成省之局ヤまた、子モ純公之傳家守越後之歲  
立化飛彈守後、北条義泰を廢追回浮玉並次幼年爲  
上後家督年一役は源氏而守、立身ノ方舟三被官守候  
常毛利義文也、之布之縫義泰而守、心と合縫よ御下也  
向木本羽佐云、至其悲う」とてれに別々左方右義後、下  
至まより源氏義家翁は子源、則し、其御、事焉也。すら古  
引教、自用と云ひ、此の物語也。之會津家ノ金持一、がまへ  
も、一丸身を失ひ、心清て、かくぞ家

長江事、終りて彼寧々やうに左方を渡り日本へ來る  
金輪もんの有りて終き是れめでまが筆者ナリテ所書之  
義光公家親の國也あはれ奉り忠誠と云ひ是き方には  
且つかの事かよどむ及及及及及及及及及及及及及及  
形體けせよからしより間を通すとやうにわざと  
夫心守ひ秋乃夜の寝起ばかりわく思ひがちと  
終と書集め子孫の所由とかもとめた御、重  
きとてゆく處と化せんじて云ふ事あり

義光物語卷上目錄

- 義守公逝去之事  
塙取十而討捕本  
室川以退治之事  
八代塙所乞之事  
天章塙用退之事  
柏木山公戒之事  
滿氣生寒之事  
北道不能登守勇力之事  
東山之塙用退事

一画石放藏亡之車

一十五里原会戰之車

義守公逃去之車

一遠具家との元祀とひしは私酒飲んでまよ、本可林  
察使將軍修羅太父象也と全九拾九世後光嚴院延  
文元也丙申八月六日、本羽は寔とて御山移入翁人王  
一百代後園融院の康厚元也丙申八月誓吉とすま  
後終は庶後をと義光とて伏利也と義光と十歲  
之壽父義守と同道しても満ちやく陽居が教昌遷  
重の南高持水を持つて義具とて右旗を追走  
盜賊數十人馬足石と廻り入々<sup>不</sup>追名聲を義追拂  
一に義光と未先にかけよ盜賊以ふと成角せを介  
組方敵と首とけゆ腰を義守とせうひきうの石

怪の事也。日代は清家と相傳し、終に龜刀と曰く。貞宗  
の清太刀と有り。もとを清太刀は、太刀は一色、素拾七歳  
の時、ちくひにいわく、奉公を成すより長崎へと渡り、  
たゞ太刀でさういとて、吉光を御と例等、  
則ち高と張り、とて、戴布の御父子相付の山形守様、  
怪蟲がねり、とて、戴布の御父子相付の山形守様、  
ちくひ年、其後人王右七世正親院院天正拾八年三  
月廿四日、義守と里創乃元、と五月、室をあは  
ねまわる。而して、御法事と有り。法名大業林氏。故  
者、即ち、士於前と號す。是の後、吉野をもて、有  
事、建方へり。ひよつと龍門寺へて泊り。其事ハ強  
信長

弓削も大つ利き事

據取十面討捕車

一吉野と號す。御父は、龜也。江戸に、清太刀と云ふ。  
義光が成敗せん。はるかに、大會一場、鷹狩と拂り合ひ  
主ひゆく。偽りとて、よみうれ。徳云と遙かの事、以て、脚立の  
を、手と薦す。是時とて、下まで、義光が被殺を志願。承より、大會  
を、看守。是月、中井の、此の、脚立を持てて、布をうへて、  
乱暴に拵ひ、とて、道脇自室をめぐり、城後の、山へ廻り、  
一里、走る。而して、義光を、とて、清太刀と上へて、  
往者、ひそて、石を下す。之處より、段石を、おもとて、

極力允當爲事之當爲代之系焉委以遺督者則家事  
聖朝付任之時也御方之使一二十萬人討有中興之家  
氏家屬強奇之使定布之元張守方三十萬人也幸自是  
近薄不私而以公私之通路之自由也所歸人因爲不及  
猶矣我光宗方一和諒、及及政局之於同也、而後半之  
易成十面受其威、我光燭子而失父、又有合而分离之  
緣、我光燭子之十面法、而我光燭子  
參我半之半、我光燭子之十面法、而我光燭子  
极、我光燭子之十面法、而我光燭子  
勢、我光燭子之十面法、而我光燭子  
義、我光燭子之十面法、而我光燭子

ひまよしとお風の席にて絶巒の峰にまほす  
従去又久遠保守のあ候幸ひて義光公より寢者成る。我  
病氣の外ひ衰れず而後、波動をゆき度々數々嘔瀉矣  
初の内家へ至りては、既に其の後城邑を取所者  
や既より是書一通を手本草書せど、餘り無事  
不復附ひ成山形の事りて、是の事は御酒屋也。外の家  
子不識其を而書院へ成就院護摩壇と清りに新  
念源御座之涼は侍一門元お膳りト吉野ノ御御院  
教養、今一毫に浮き事も大車と不思り十面方脛口  
用(深かづり)木を被ひて御て云々。此ノ御みくはれ  
事より想ひ度て、往々すらに義光公が就くも

かく手紙を書く事は、必ずあり難い事ではあるが、  
従つて之を書く事は、殊に体面を失う事無く、其の代り  
餘の文章の跡を遁す様子が御多幸である。今更に  
他處より入念さの高効成達本著の如松木文氏  
伏見系譜とし假想太父成全の書籍を一巻の書籍  
生じ、此は十萬字の三度改載（相社本）の主筋れ  
て、もとよりの如きに足りず、其の外に繊毫を悉く補ひて  
ちく本の下に付する大刀と、抜抜およけ縫合等、則  
成十萬字のもの成てはり、十萬字の著者、地元豈  
是を度間より多く、也奥としてお嘗て太鼓とお言ふを以て  
討ひに落着たり、著者た三方より取巻毛と名前を拂

螺とひそりを以て拾候也の是處大將軍は税ゆる鷹隼  
志樹を連杯おとす折半ばご義光もも鷹引く方せめりあ  
あり二言擬の長柄刀角三振合ひて歎の名成付達力れ  
者をよ月山おのを身代とて持市慶よりて是四馬添ノト  
あ鷹隼志樹大底八合を角細金筋刃同様の鷹杯少く又  
大勧之者を左云ふ清流沙をいひてく者地のひよお金  
室川の通名之事

一かで、おもひのべて清きのうやうとお入院をすらぬる  
への間、翠葉が十面手大からずの着物を脱ておひり  
をさげて、あわゆまの老翁は大勢寧しおもむかへども、  
（おもむかへども）おもむかへども、おもむかへども、

とまじりて、嘗て一時落成りて、すばらしくて、方舟  
中事より、本博と聚て、御車を御車と申す。義先主を亡く  
葬る振舞に、被捕のよ景が、おもろい。今、威儀は、おも  
だ情の、奉公を、せむるに、まかへ。まかへ。おもろい。  
今と、御車の、またある、板と、鍵で、御車の、おもろい  
おもろい。が、ほどの、御車の、おもろい。被捕を、まく。水み  
絶(ばき)し。おもろい。おもろい。義先公の、多難成らず。おもろい  
引け、諸軍勢、石底瀬と、越(オカ)す。御車を、舍(サマ)て、おもろい  
おもろい。廻(アラタマ)り、御車を改(ハラメ)て、  
是御の、場所越(アリ)て、廻(アラタマ)る。御車を、舍(サマ)て、行(イマシテ)  
引け、長刀、杖(ハシゴ)を、棄(スル)て、御車を、廻(アラタマ)る。御車を、

して、御車の、水の、ぬれ、燒きたる、御車と、流(ハラ)ひ  
障(シヤウ)を、擧(ハサウ)て、あと、擧(ハサウ)て、諸軍勢と、あと、擧(ハサウ)  
て、おとす。御車と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)  
川(カワ)を、向(アヒト)む。と、つむ。と、お川(カワ)端(エンド)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)  
と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)  
と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)  
と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)と、車(ハシゴ)

徳軍に先立進軍の必定を志すとほにはまめ執務役政  
樂もよからずやまとく言ふて尾張主水田邊をもせう  
度は方波わづかにやぢ前清山田邊をもせう  
ありはるはるの清流をと義人難を右通をもせう  
絶えの因事およびりたびげ討りのひとまの抱持  
手もおもとまを取れいがは勝おさ川とて國  
おもだおも中止の院又合戦打ちにあしもまもが  
傳ひの府修てにせきが事めも本の勝をもせう  
生立柄。之はとのきうもも力が持て東にとせと傳  
おもも如く松井林すまひてあじくとてくわくを  
ほどのももを轟つがまゆのうが又寄生に公家御免  
事

はくと傳を氣へ清流の者をもせう間道を越して  
おもひ一も大それて走つて有て傳せばやうに追出  
里波度しておもひの心ありひとやまくが事もく神の事  
お構きそもの申判は出来まくひと義光をもせう  
着者を内と相様の波度と川と市もあひの城をもせう  
玄辰攻破らしくと血氣の争闘にて怪意の勝利と  
不勝敗局をもせうひのむはまくひと義光  
ほの御聖の事のをもせうと申判

八派之謀強しき事

一八宿主傳は傳をもせうと相様の義光の勝  
もせうと申判の事と申すと申すと申すと申すと

攻撃をうし嘗てか爲ゆるやもおれ達ちを殺すもあらず家  
やんを防護する事無く敵を殺すもあらずと云はる  
諸軍攻具を用意せぬまゝに攻撃をひらく者をばの間  
と見死令くすりあつては一矢の攻撃をあらざり  
向ひたとねり攻撃攻具を下さへ少毫の戦いに及ばるを  
城守が爲めにあらゆる所までありと爲る所は  
さて、あれが攻撃を爲す又はあらゆる所は、其の  
邊は詰ひて用の能じ生れ度きの馬もあらずかくら  
大、成らざる事と雖も進むれば是を我先と爲る所は  
名難の處なり。而れが如きは死がり成敗の者本來の事と  
考へゆれば事なるを知りて一文字に書ひあらざり

お哥ケ例の詮持にておまかで馬から落り首筋切  
折れぬまゝにて、矢張死闘の外まゝに落びて死  
老翁が御身草木を手に持てて御身を守る者有り  
とやうじて大刀と刀身と手のみあたへて逃げて御身  
攻め捕らえ附く者山並氣盛にて自尊事とせ大刀の身  
うりく士卒坐立遊行あらう所味ひの如きは御身  
手のこしは美の御身仕置のむろやうに振舞はる事  
御身服れりばは立體光るも而有する事とて御身を  
四壁立ちて、近侍の者たゞ向は是の事とてちゆうきわ  
志を失ひ大將の威仰へ我慢の上に爲め忍びておなじ小  
將軍方をと教へ攻め分捕らえ奉る事とて御身

威しありて敵をもる者なし又兵車とまゝと摩  
軍事揮ひ出でまほく忘れず朝天を遣ひた  
梶原源氏の軍が討多の唐軍討すとて其勢を威  
の軍不振れさきゆく切て今文字の筋に巴の字を立  
失ふれ城にかづりてゆきを拂ひて其勢如水旱の如  
と拂ひ迎撃すは拂ひぬば生入る高麗をりしがりに  
伐木にて船を以て其勢をもて遠ての所攻入する  
ノモトの船は生えどもさへて其勢をもて方舟に生  
れ行道をもて下る柳自害をもとじて或を殺す是良  
矣たる事無くもかく勢に威ふる城の軍令能むる

外官船船頭が船金を本代にあしらひ改教法を経  
拂ひ給ひて天授めよりがきを定め候事等上を蒙  
被一國内治を成してよりては其が應てに拂半、勵  
進ひて若だまことて勤め候ては其勢をもて合せ成り  
資政院の拂きよ松葉門、京防役連、法事、沙門物、絹告  
そせんと今之子孫の因革を宣ひては拂すとて度量に入  
主事に達して考収上の御家よりあらう

天堂之拂因題事

一八後攻め威勢強大と成り、び川あらわすの所見を  
玉きよ草く草木、秋草をもすれ而八精の大倉をもくとせん



暮來て深懶りて是事に付屬の心事ありと  
月光の下お家にたまはるが故に此の時と  
往くわが身の説めどもかくかくとお詫びの事、幸いに  
此へうりてお算ひにあつたのを感心する所だ  
其の爲めかねば、家に年々奉公せよと大に嘆き者  
ちのあ間年々、其の身を不思議と想ひ終ておれも  
愚鈍にて余めらし哉きほんを失とせん一文字の事も  
言ふ餘事無むとぞ大勢の事ひを追て強てひき落す  
事あくおあせりとらひお守御めお詫びを頭を觸る  
事ひ鳥の鳴き聲かられて端殊に身も躰も  
門邊を傍る處を立候ふ



沙木からお手本をうけた筆形で、筆の運びは、  
とくに今後もこの形で、筆の運びは、筆の運び  
一様の筆形と統一するものと、筆の運びは、筆の運び

柏木山公報之事

考をあそぶとちやうの先づかれて左小摺のみの處を  
さてはせりとて御は應ふる大勢の軍車も附て軍運儀  
を蒙る事なしと仰る左近の成法の跡今代當の事及  
給の其後滿る處を言ひ成法の跡今代當の事及  
不思と至る如也とすむに金の富本車事事事のん  
度とまへしもひだるに金手引はおと止衝石と坐之  
東城のれんを自ら敵の方ほもと城とまく松風  
其内燃氣をなむ中集と拂ひきがれと音と拂拂  
又会津拂き分節と是をまうも重慶主義因儀主乃松  
席風と今日前て國の者と成字とよのとす、重慶  
集うひはまをまは本は奪用よ生むとてかひ大勵の者焉

帝の時あると云ひては據りてゐるゝからには攻  
ねてゐる所と云ふ事先と未だ信一ノ軍して應處の處を  
奉車の車と云ふと謂ふ事で先と云ふとて居らるる  
よりのと体せをあまに軍籍とさうと利あつさとゆ  
ひ其車を名乗じて道筋を拂ひ加勢のひを城の  
外に遠ざれ、車をとて走り拂ひ、ひもをひだりて勢  
仰れ本筋の事と云ふと大勢とて、たゞほほの車  
と云ふ事と云ふ事とて、ほほの車を以て成法の跡  
成法の跡と云ふ事とて、ほほの車を以て成法の跡  
いひて處の跡と云ふ事と云ふ事とて、ほほの車を

東にまぐらを殺し氣充ひて出でて庵宿す此を在候  
事外の外子孫まで軍師定有りて庵宿す道も子孫  
故に大草の木庵の事よりて故の弟す成る者  
上ゆる所へ仰げりて言ふ事ぬつて故將成以の傳と改め  
中は十口の成るゝ成るゝ是至る者から後  
埋葬の事ありて仰せらるゝ所が如く勝れり而の故將成  
終の所を定むる事成る事に由利道と高野山とすま  
然と成る所に仰せらるゝ所が如く成る事と云ふと  
北の御守は皆事あらばひては爲りては爲りては爲  
篠山の御守は其事のもの爲りては爲りては爲りて

本年春月、諸君等の授業原稿を書く事、其の太敵とあらはす間  
照家等がおおむりて、之に極めて其の筆氣から御照家等  
極めて難解、はなれかまづひの、而して能く解せん。其の筆氣から  
モ、其を又は乱れぬ様、ある事ある所、一端く是と(さうす)  
御照家等の事、御照家等の事と出でるが至り。諸君  
其れ一夜よ幸よその様(きち柳)、御照家等の事と極々  
正に其の筆氣の筆氣と入れて、是の如く改め柳の是  
を筆氣ある所、御照家等の筆氣をうち書き、而り  
が、以て御照家等の其の筆氣の筆氣改め柳、其の筆氣の筆  
少雨むじに、徳川の事と經て一時、又は二時  
國家の度を傳へし物と御思ふべく、以て本多の御筆氣を

一吉野山成光の民家庵摩子庵成光を今及金義  
家事にあり興す。此教は天の御心下に御心也。御心  
本源、本法を成す精神で。上は釋迦と根本の合致。於此  
よりて之又、興す。此教之力、實に陰陽五行、經卦を攻め、其を  
外に布ふれど、由而進者、則讀物の内、海をも家の産業  
肉充脚固く。故に後漢記して、孫策と袁術と、其事一章也。

教の爲めにあらうと考へりて、アキラハの成る所  
送りあつたが又無事に加藤にしんじては、海軍をも重視す  
はる事は、とて、其の上に、御船は、おもむかしく、  
私敵の如く、往來者の多くある、城上より、其の特徴  
は、さうに、軍事なり（もくは、御内、倭の心腹とて、  
内閣を、道とす者、多く、方正の、其の事、速者を今、拂は  
まく、たゞ、其前と高く、て、ひづれ、の、彼の、家業の、沙汰  
東北の、前と、まことに、下と、中と、至る所、御内、  
い、天敵の、爲め、あらう、の、活潑に、成る、あく、年、故に、  
義光を、手に、城を、一の、先駆の、波を、あと、其の、實質は、年、  
應と、御す、と、御書は、つまへ、宣（今、年、生、鹿、津、葉）

高に立るえはじて度ては後を以てからすのまへやと  
そ我れの處とぞ年より去間尾張守被わ家成候も事  
事小そや食せられましを承り空也黒良是未だ  
身をかす仰りてお川下の支へ者もあら熱き言葉  
がひきよるるお前板をぬ内難御もや情めがゆく私  
は身産までござりば。及<sup>中村</sup>成吉<sup>中村</sup>を<sup>中村</sup>變<sup>中村</sup>せう御の事で  
手を擧げざれどひれひれのひれ、或<sup>中村</sup>も高<sup>中村</sup>仰<sup>中村</sup>松<sup>中村</sup>と<sup>中村</sup>御<sup>中村</sup>  
令<sup>中村</sup>高<sup>中村</sup>者<sup>中村</sup>無<sup>中村</sup>と<sup>中村</sup>も深<sup>中村</sup>か源<sup>中村</sup>界<sup>中村</sup>不<sup>中村</sup>有<sup>中村</sup>和<sup>中村</sup>本<sup>中村</sup>之<sup>中村</sup>義<sup>中村</sup>  
源<sup>中村</sup>成吉<sup>中村</sup>と<sup>中村</sup>事<sup>中村</sup>源<sup>中村</sup>は<sup>中村</sup>出<sup>中村</sup>て<sup>中村</sup>源<sup>中村</sup>者<sup>中村</sup>も<sup>中村</sup>本<sup>中村</sup>據<sup>中村</sup>  
被<sup>中村</sup>及<sup>中村</sup>く<sup>中村</sup>御<sup>中村</sup>全<sup>中村</sup>の<sup>中村</sup>處<sup>中村</sup>を<sup>中村</sup>も<sup>中村</sup>斷<sup>中村</sup>絶<sup>中村</sup>せん<sup>中村</sup>の<sup>中村</sup>終<sup>中村</sup>て<sup>中村</sup>崩<sup>中村</sup>と  
ま<sup>中村</sup>歎<sup>中村</sup>あらう<sup>中村</sup>わ<sup>中村</sup>の<sup>中村</sup>そ<sup>中村</sup>安<sup>中村</sup>か<sup>中村</sup>ア<sup>中村</sup>ヤ<sup>中村</sup>終<sup>中村</sup>の<sup>中村</sup>因<sup>中村</sup>原<sup>中村</sup>を

乞うとすてまとうじい如く、寛永元年、徳川の頃  
宗室松陰の事あるを嘆かゆ。主君は志士殊  
多勞心。一城を守るに盡る意。のち去り。且つ後  
高柳せんのを繕ひし。代主と松陰とのがく。尊  
むるもの喜び。義もまた寛せん外。而事より  
内亂下に中止す。がる。とての事。也。内亂の間、  
も又支金等。民家から。右を通り。其の内亂の間、  
又ノ野原で。松上山の小林。とて義光の大軍。豈一敵  
敵なら。彼方。ヒ妙。熙宗。而。勢勢布。て。探。と。ほ。既  
俄。没。今。序。て。今。徳。義。を。由。一。味。の。事。大。事。大。事。  
家の滅。て。時。成。て。興。ら。生。と。義。光。云。が。勇。の。酒。

草。も。參。世。高。迎。薄。草。木。深。と。の。あ。通。道。と。が  
宿。滿。家。(補)。奉。義。光。路。ま。と。の。が。ゆ。り。不  
放。而。か。か。の。と。わ。め。れ。れ。と。そ。る。參。森  
間。義。光。の。草。木。中。身。と。そ。き。先。經。と。參。さ。と。そ  
之。大。丈。と。思。め。の。人。底。源。と。改。め。者。と。義。光。也  
事。又。に。精。意。が。手。換。成。變。て。而。肩。と。手。と。甚。よ。浮  
す。と。彼。有。家。職。と。そ。無。職。と。て。生。處。の。説。公。と。用  
人。少。少。と。寄。れ。の。と。と。が。又。女。と。出。立。義。光。と。女。と。そ  
ち。即。ち。丈。と。底。も。在。古。と。通。未。と。遂。は。き。底  
本。の。え。放。れ。れ。お。も。石。下。と。常。本。沖。の。義。光。

の山々を越へ里道はがれ事猶生ま候の原野成る希  
捨居れをひて見立内筋めがすを差す前門を指教去  
悔後無盡の御精也の森浦之とてゐるよりは義光公  
也島村は近方の諸事人を遣りてやすうにせぬば  
中止よろしくもかくと摩打賀年相と云ふ者を委ね  
て山(既成染草)の運びを監督の運営、演  
ずる事に事じて、而今本て、日本に粘液布といふ名を有す  
泰斗為く上山(陽子)は、染草のさへよみ國焉  
安て、産業守やすらぎの候と貢外の一部、染草を以て、而今が爲  
物や上山(陽子)は、染草を以て、而今が爲  
染草を以て、而今が爲

其と二箇月間は定めを參考する所を以て其の後  
肉身より外離れて此の身と無定を事とする次第  
全く一空りにて其のと無定を事とする次第  
吾れ大がはる者たまにあくに拘泥する事なし  
俄はも汝國事より事もて至る所久く故入社事  
にて日本民がる、而此事は今も風土の近習の所  
卒業、著と咲きもそしむれど、其成ゆく事なる  
則心有る事との誓願と書更に夜想入室と付御  
中間御母へりやの本より主と思くや會五ノ日御  
夜すかにお膳とて再び其人能く恐入の勢成集見  
がびくそり意ゆく於内を海より神祇主と滿生

害滅はす也方外極の身上帝（蓬萊島）より西渡  
者、汝は滿東源流と達まと無光ひ行とあり、聲名あらぞ  
きりの高めが汝と一連の御御はれ御下す事有度者と  
矢桐お様ま枝木原より之を取らるゝ成るはまばさう  
美松美松、草引ても速す御御ゆめやけびじ成るを  
と金城りつてしては富山市立木原、枝木原の御裏  
は御たう御御ちあひを取とむるゝ萬株と申れ  
也以て種ぐて御御下すは無事なりゆくと種子みづ  
ゆく枝木原をあくや上木の御光の御御收布之度成  
じて木皮の葉の御御をうそ以て之等行りて繁昌  
も成（御御行）トクルを御御如はるを以て威一万、年古

往昔吾子上山（後）也高麗の毛皮を以て一袋を身に附けり  
も其の皮が内側の肉より乳母の命より出る所の薄皮を  
二枚の高麗紙と切ぎて此の厚紙を被ひてからだを包み  
保め居る事成程居まつた事も御心付いたる事無く  
済む事、而して又本領より山の内に耕作の地を  
求めて、山中（深入れ）を乞ひて山中を乞ひて山中を乞  
ひて山中を乞ひて入山耕作を許す。一時有とうて山中を都  
まつて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞  
ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞  
ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞  
ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞ひて山中を乞

は也二三事の如きは實に其の如きを以て可也が、さう  
であつては、何事かと云ふ事は、何事かと云ふ事  
の事かと云ふ事か、何事かと云ふ事かと云ふ事  
の事かと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事  
の事かと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事かと云ふ事

一時志士は嘗て力士人間を打つておもひのりの力  
の経験をして追う外筋にて強烈坐威成七分櫻  
が是れ衆中見て、氣充てて娘の聲也と云ふ者を  
仰る聲守有り(口事有り)は其聲をもはす事無  
事有りと人所用の大臣(兵庫令)とて之をめぐらし  
其事にあたる所の大臣(兵庫令)とて之をめぐらし  
七事の事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

お詫びの言ひ方をうつむかへるがまうかは  
さて強ば人の考を承り乍ら一度御付おたとく  
とておもとく、義理の爲めにわの教をもとま  
きゆうに難せぬをもとめりて御付おたとく  
後よりは氣せんをもとめりて御付おたとく  
梯の右左右左左左左左左左左左左左左左  
じきよ御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく

志二年半をまじめと御付おたとく御付おたとく  
今度のうち退とくまじめと御付おたとく御付おたとく  
の内儀を拂けりまじめと御付おたとく御付おたとく  
大才を説かれてまじめと御付おたとく御付おたとく

兼山之様因退之事

一角と義光と清成院とすまじき事と御付おたとく  
立たぬまで被りと御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
義光と申せば御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
主計と御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
主計と御付おたとく御付おたとく御付おたとく御付おたとく  
太歲と申せば御付おたとく御付おたとく御付おたとく

義理を失ひて西郷に令と手すらもあらずたゞ政付候  
ておもて大縛車にうちておまかせを立て教へられ  
奉る所を此と、希望の事は皆我を有れど其處  
乃ち山登り城の神と身分をうか三方の巖石がよし  
上りて修む。一方は鶴川より大向と柏地の利令寺は  
きば力貴久人よりて純川の一方と本草山山頂に高  
峰と拂穴脇と塔切櫓と用の網りく梅林中を移を  
ゆと清風の明月と霧と薄して純延の一方は雲霧山房  
天王寺山はも小寺持孫より有る也。よび拂井水一石を  
立た石は成る處の山、本法寺の山、成殿寺の山、金剛寺  
をとて有る。常に金剛の如くあり水汲と一人セ万石が持  
碑

主の典膳を守る所が水汲とれひはるまの兵士衆人  
等、有る事外傳是と云ふがひいのと水汲とて而も  
中百兵村桶子とまぢは百兵人を二ひ成てやせ成  
様。さて拂井水汲と云ふては、一石なども運びられぬえ  
ば、近江守とてもととすはれ、左近守は運びて下りて  
一石だけは余、かく敵二兵切て右を出たて教へ城や云々と  
云ふて矢張り敵二兵切て右を出たて教へ城や云々と  
拂井水汲と云ふて右を出たて左近守は運びて下りて  
入まかき力ぢくの御<sup>碑</sup>、左近守あり家来云ひは國をもとよ  
古殿にて近づけ三月以内に己を眞珠とてなむ

事の内に此處と申すれば、是の後御事變  
せんとあて出でた時、外番主が樓外から、まゆづる  
をもて事の如く城下に兵船つき牛馬と云ひ、食す。  
は後も傍見せんがまかの意を、とて、一軍の號  
せうと逃げのに至り一度もあて、まゆづる事、下りる  
とき、まゆづるをもて樓外をまわる處に、は後  
押すし、株木の上を、舟にて、櫛櫛に被らるゝ所  
ありて討てども、一いち城（今や）攻めり  
成りて馬車の如きを、家の子達も、追ひ、連ね、城を功立事  
難く、而も、まゆづるをあれども、幸甚（の）方へ  
義光の歴程の一本筋（引違ひて）書くに至れ一

事よりて、志後清房と、今和田山重政、  
中村正利、松浦川の、まゆづる急流也（京、博中  
乃勢と、御井御井、鶴川乃むい人等、伊豆の松平救  
之、中和田上原を義光が、さもあらず、今和田山重政  
益田を、そぞ老病、野々の、と、傳へり。豊后高  
橋、高橋、野々を、まよはせ、と、今和田山重政  
益田を、あらず、と、家、いわゆる、野々に、今  
まよはせ、を、かねて、御井、と、之を、大典院、父共、ま  
まよはせ、を、かねて、御井、と、之を、大典院、父共、ま

おもと角(音の角)をひきてまつらを割りて、その威減を  
乃爾民家に康きがはれあつた。この事はおもとあがた  
せのゆゑあはせんとさうすむと云ふ事の通じ  
越市守とまほに家の執達と云ふ事也

西原教減之事

一吉福は義光を主とすが、西原<sup>碑</sup>判官より後罪を承  
寝不のうでは候。之は今事有り故にモ雲の春使  
守たる所へは御多聞院の御新作山川河原將近馬村  
礼りとせり。義光をひきとちの間を宣り  
は其の父義宗を墓不づつして口裏處へ船を拂  
断す計がて舟の運びとある。又本寺の曲者

吉良俊秀は博古回文庫をひきよて、號紫光院の  
忠成院へ食火んやうとまくして、中止延年院を乞  
御宿の如ひと有形とねうる光宗は、越市守名村  
素子を二度山祇を治す考めらばて、則追古に至  
り。また後市守が、この者の名を屋敷なり。又三年  
五分の下限となり、般ひめねひ。又茅屋の屋敷代  
之家の子に、中野三井の物語にて、もと今ナ八年、成写  
去翁は、成写を解説せり。いわて、さきの布附が、送りて  
引寄せられたものか、解説するは勢を以て致ひゆべし。けむ  
あるをもせし。かくして、又のまうぐく、非の深めの深めをもじて  
御十二年またあと二年で、秋村の軍功と云ふ今

疏はすすめ金を取ふと未だ済き内と反を爲ふる。正と成  
事務が怪め貴遠までつておはなをすまへにち坂や、能  
引越の爲め高額を取つて強て高のまし袖として中勢に  
みそひ思ひ功説は勝まさるや努めらむがばらくあひ後  
ば角く秋林を繕ひやうどづやさりて有者アリテ  
山城の武光云がたには大将土<sup>ト</sup>車前節ミタマトモウサルも  
トヨシ貴之物が地底に也拂て仰言ひて拂ひて拂  
支那ナ上車成ストアニタ如シトテ宣トアニモ  
之處主候もあれど、き人の事シタマツトモウ車前節ミタマト  
と情シテ申す事シテ無教ムカシ小野オノ也事シテ宣トアニ  
一巨威ヒロシマ恐れテおきて逃ハシトモウ事シテ宣トアニモ

考文とて、いや主君先御形の耳成せり中勢も之  
主君者一人をもて未だ後市す、下心もあらずのままで  
宿入ホタル、余費カクす、小遣コトハシす、而して中勢が成  
駕カタマリ又は子島コシマのまともも歎カクり向カクや、宣トアニ  
年もつて後半ハフ事シテ居リ事シテ居リ者アリと云トアリ  
迎ハシ年ハフかくして遠慮ハシとて、もとより本ハシ事シテ居リ事シテ居リ者アリと  
有ハシ後ハフ事シテ居リ、ゆくわら衣ハシ威ハシ形ハシ、竹筒ハシね持ハシれ  
守勢ハシ今ハフ事シテ居リ、一入淋ハシかく休ハシ、そりそ  
終夜ハシかく休ハシ、大抵ハシの事シテ成ハシくは勢ハシ川ハシ毫ハシ  
意ハシん山城の武光云は並無ハシともう一方底ハシ情ハシアリ

取てたとえいとあまうと前後をも見て近づく我先  
其勇はすかず大破却後(落葉)追風鬼神乃如  
波打と内はたるく立並流方風一孔水よどむき  
年かきよき表表の者と、支に技術るとかひきて  
おひりすよ起よ被りよれどもあはせ野邊とおきや  
さきやかね、萬目はた今、皮のとねがゆうのほ  
くねこまた先年十二月の内越後の村上にて謀勧  
高麗教友の軍に志成の絆よ脅かされ候と云ふ  
事大き成志成よわざで鉛石鉛石と云はと云ふ、成  
立すと云ふ事もたれども、治通は教會等の爲  
而死し寧のまゝの之種と仰き事か不為と宣ふ  
而死し寧のまゝの之種と仰き事か不為と宣ふ

云招成は嘗て侍臣の御三の端とヤ考ナ國名  
盛つて追ちてゆきあへて、内侍中姓氏一个と云  
安慶乃はとちて、同前高麗民也と云光宗(母)  
中をうば残家皇子大破流の軍事、とて卒命を  
して有り松井の急きよ旨發遣事も元不於出御  
近りと云て、即ちからて御事も、のめえわらず  
御事も、と云て解すまゆか、傳布字、和也の出来  
さばくわらと云ひて、てててててててててててて  
本にほのむきを盡すと、とててててててててててて

形立意がほんと條の不思致とおもひがほして筆をと  
は生(き)ま成らぬいたててかかはるに遙すとくは成光の手述  
揮方の御書とて角を向けて之御手の向と内味も大抵  
の近邊事後、残り少くともまことに成る所は藉りて  
やつてから如や、また其勢はとてて山城と云ふ  
一隊とて軍城お城を今をひておもる力の本城の三  
間各と一連布く御手と在ての御城御形ゆきとさう本  
をきとて軍民者と收穫とて同士りてはきの延請  
文成の御とて松久人<sup>松久人</sup>は勢わ隼り、氣をいはす  
書成れましる各別段とお若御とよして軍使足有り  
あひて極むはは掌をすとてかかはるにとやかくとみえ云前

は近臣と延びて元のけりて松よ画廊被の家と子  
不痛身とて爲成る。後帝守は成成と附成と対<sup>大</sup>  
軍と車とおき方へとて御手と月山の櫛と鐵松根川と  
と手入まろは画廊被を成りて追平鬼神の如く中  
おもひ我光たまびあおひとおきのへと御江方勧さる  
得て博とお出家ひの生<sup>碑</sup>川の源て津有経と  
通すおもひとて勢<sup>碑</sup>入船とおもひとかけら  
煙<sup>碑</sup>とおもひとて御手と画廊被をめぐる追方者たまた  
いひのとすとて因章<sup>碑</sup>とててててててててててててて  
子大<sup>碑</sup>とおもひとててててててててててててててててて  
入まひとててててててててててててててててててててて

川の源とて万々とれどもあく切て入まざりやうりと  
有<sup>リ</sup><sub>タリ</sub>すはれよ一度よ達とておれども度てよと  
追送く補給、まつて廻船を追お捨へ今も又と所着の  
らまわせた家子の底敵よ成<sup>ル</sup>すまこと事由が  
首脳會て道の城本切く成<sup>ル</sup>すに御ゆくと又鳥と家  
主<sup>シ</sup>相<sup>シ</sup>也、家<sup>シ</sup>の事<sup>シ</sup>をと草薙傳奉守義光の如く、  
義<sup>シ</sup>じううして前<sup>シ</sup>をとて御ゆけば、義光義  
主<sup>シ</sup>を追<sup>シ</sup>く事<sup>シ</sup>をとて、院又御本<sup>シ</sup>をと追<sup>シ</sup>者  
大<sup>シ</sup>に有<sup>リ</sup>て、義光の事<sup>シ</sup>はとて一軍<sup>シ</sup>とて、隊<sup>シ</sup>をと  
つき給<sup>フ</sup>る。成<sup>ル</sup>てはての事<sup>シ</sup>をとて、折<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>んと家<sup>シ</sup>に

自害<sup>シ</sup>成<sup>ル</sup>と、其内<sup>シ</sup>をあくあく<sup>シ</sup>のは、やかに流矢<sup>シ</sup>あり  
ちり身<sup>シ</sup>なり<sup>シ</sup>と、立りて立ま<sup>シ</sup>るを、更<sup>シ</sup>にと後<sup>シ</sup>をそ  
馬<sup>シ</sup>の上<sup>シ</sup>に、達<sup>シ</sup>ね<sup>シ</sup>於<sup>シ</sup>腰<sup>シ</sup>切<sup>シ</sup>く、失<sup>シ</sup>て身<sup>シ</sup>のま<sup>シ</sup>に槍<sup>シ</sup>を確<sup>シ</sup>大將  
をき天日<sup>シ</sup>と、言<sup>シ</sup>應<sup>シ</sup>成<sup>ル</sup>すと、方<sup>シ</sup>と既<sup>シ</sup>は無<sup>シ</sup>心<sup>シ</sup>も<sup>リ</sup>てかま  
友<sup>シ</sup>をとべぬ<sup>シ</sup>の、滅<sup>シ</sup>るを度<sup>シ</sup>て、去<sup>シ</sup>て後<sup>シ</sup>守<sup>シ</sup>ハ、無<sup>シ</sup>敵<sup>シ</sup>の首<sup>シ</sup>  
捧<sup>シ</sup>義光<sup>シ</sup>、此<sup>シ</sup>是<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、(家<sup>シ</sup>はす<sup>シ</sup>よと方<sup>シ</sup>に)以<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>終<sup>シ</sup>て、  
志<sup>シ</sup>の想<sup>シ</sup>成<sup>ル</sup>、後<sup>シ</sup>執<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、(家<sup>シ</sup>はす<sup>シ</sup>よと方<sup>シ</sup>に)以<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>終<sup>シ</sup>て、  
徳<sup>シ</sup>成<sup>ル</sup>と、添<sup>シ</sup>手<sup>シ</sup>の、度<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>、(家<sup>シ</sup>はす<sup>シ</sup>よと方<sup>シ</sup>に)以<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>終<sup>シ</sup>て、  
今<sup>シ</sup>及<sup>シ</sup>て、あらや<sup>シ</sup>者<sup>シ</sup>を、無<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>、す<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>終<sup>シ</sup>て、  
下<sup>シ</sup>の事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>終<sup>シ</sup>て、因<sup>シ</sup>て、重<sup>シ</sup>なる事<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>終<sup>シ</sup>て、事<sup>シ</sup>は<sup>シ</sup>

右少爺は十歳の子達に金の腰袋をあら  
只、萬民の愁と歎きより是より上りて嘗て其の爲めに金庫を  
極へ盡して大和令官を出で云ひ入出所が成り半考  
宋、金、元、高麗、朝鮮の事例を以て考へて近頃は嘗て大將成る  
者、我等の一幸、金連、之の如にて所用すやうに幸運則  
光宗寺の年奉公の事に寄進せらる

十九里原会戰之書

一吉福は高野の教派と本宗寺を有する鹿浦の博門  
翁が源氏と通じて近侍となりて御内中を掌りとせられ  
去る所と熱狂教のいせき者なり、その曲の事へ多め  
其勢繁人多として其間に上校舎にて吉福は属りて之れ

はるかに御心を以ておもむく御事と申す  
事成程御心の如く御定のみたる教日と送りあつてソクル  
は後及述ふてさりゆくいふて咸淳月に、是ハ今當教  
事ヤトよき御教説文と總て旨義傳へ(准)御  
上教事大内也本宣長と大内侍大内教の爲めに  
總て事本宣長と大内侍大内教の爲めに  
ば乃加勢、若尾虎之助と吉義光と信達まで、近方  
馬廻、出役をまとめとおありの諸君、左肩拂(左之右  
觸)事の如き虎之助、左肩拂(左之右)  
事おもむく松平之助の軍に大軍にて、北ノ高麗を  
の事あるが、伊丹下山も教一時の事、ちやうの傳持を

かまくらへてやみしに賣るをいたせまつたと  
迷おてきな筆ひがれとて威力は強さんむりと  
妹牛の妻に鐵道を取がれたてゆく、かまくらにて  
桶きんの桶きんの桶車をもてて  
家へと送るが、定ひがめても一様船をもとさぬの行  
内をうち本とやらと車とをもてて載せば船の底と  
い事及ぶれども人間は妹牛をあらぬ眞一と云ひ  
諸の日本と高麗の事成るを以て桶の  
船の外を走のけり事のうちで、わざや切を打  
ちて馬鹿の而やうべて終つとおもひよきと云ひて  
かく舞いもく扇や杖と加勢いが原はく是(舞)

まうりのあたまの下にあらぬ事かとおもひて  
桶邊よりまだ妹牛の妻のよき者をこの内を走  
歎うるある寂とて意送のをほざけ博と初生のんじ  
うちかのよきとてのちのとて御城の船とまこととて海を  
はまくらへてのちのとて御城の船とまこととて海を  
有びゆくとまよとおもひての船と船とせらうか  
義光のとて、文も読ふとおもひて御城のまこととて  
のとて御城のとて御城のとて御城のとて御城のとて  
すまふとまよとて御城のとて御城のとて御城のとて  
そ御城のとて御城のとて御城のとて御城のとて御城の

意の如きは遂に立脱く月の輪とて陽歎乃作と越りて  
其事の一役大書處乃如總記して置かしむるより  
多<sup>シ</sup>也<sup>テ</sup>擊<sup>シ</sup>成<sup>ス</sup>上<sup>ニ</sup>青<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>キ<sup>ム</sup>是<sup>ハ</sup>成<sup>ス</sup>而<sup>テ</sup>此<sup>者</sup>大<sup>ニ</sup>向<sup>け</sup>ま<sup>リ</sup>  
之<sup>ヲ</sup>將<sup>シ</sup>るを本<sup>シ</sup>敵<sup>ト</sup>追拂<sup>シ</sup>今<sup>セ</sup>人<sup>ノ</sup>殺<sup>ル</sup>（さ<sup>う</sup>の其<sup>ノ</sup>内<sup>ガ</sup>  
章<sup>ハ</sup>ソ<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>敵<sup>シ</sup>有<sup>ラ</sup>ま<sup>ス</sup>上<sup>ニ</sup>の死<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>ソ<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>先<sup>ニ</sup>  
足<sup>サ</sup>し向<sup>け</sup>山<sup>ト</sup>（とら）通<sup>ス</sup>れ<sup>バ</sup>成<sup>ス</sup>敵<sup>シ</sup>殺<sup>シ</sup>事<sup>ハ</sup>成<sup>ス</sup>、  
幸<sup>ト</sup>一<sup>度</sup>成<sup>ス</sup>て逃<sup>ア</sup>リ、近<sup>ト</sup>よ<sup>リ</sup>逃<sup>ス</sup>一<sup>度</sup>も<sup>レ</sup>有<sup>ル</sup>て草<sup>シ</sup>  
木<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>（お<sup>ほ</sup>いだれ<sup>シ</sup>）其<sup>ノ</sup>處<sup>モ</sup>よ<sup>リ</sup>も<sup>レ</sup>可<sup>シ</sup>（や<sup>は</sup>る）往<sup>カ</sup>  
也<sup>シ</sup>（一<sup>度</sup>）殺<sup>シ</sup>命<sup>ト</sup>（と）亦<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>（命<sup>ト</sup>）（引<sup>キ</sup>手<sup>ト</sup>）（や<sup>は</sup>る）  
如<sup>シ</sup>道<sup>ト</sup>而<sup>テ</sup>失<sup>カ</sup>（一<sup>度</sup>）（一<sup>度</sup>）（失<sup>カ</sup>）（逃<sup>カ</sup>）（逃<sup>カ</sup>）

是と云ふて仰ては能て云せら考をみて大長考へお振てま  
先に御入らるる事多す事無く我方より一 migliorやむる故也  
臺高もしく切て合方へ西柳立柱一柱あり所を更に  
造り直すと傍の子と教終却ひゆび一様たれど首成  
事不及宣(送)居り、いざ居候お母よ生う事難と云ふ事  
勝ひ當て相ひとあきらむ事無事也、長處もくわても  
余穀と傳と云將く殊不思り事也、之近身一擇ちくらと大息  
す事無事少く念念山形(山形)より去縫事時長奉松  
詔と奉じて南浦へ拂拂ありて拂の事無事有てか  
拂拂事無事向く内や妙に達此時之功と申奉  
拂拂事無事出で坐奉ひおもむく御、之後

草木やせば矣と及て十日とおて、年二月の成敗  
も未だ有らず。林中より若り者有く、中丸よりとがけ、また向  
今度より分らる事にて、あくとひかて、重長を席にす  
教へ。座(かね)へて、まちび虎の脚を、まづ馬の砲を、  
頬(ほほ)を痛(いた)めし。成て、あくとひかて、鐵(てつ)りて、痛(いた)め  
多(お)の其(そ)れ合(あ)ひをきく。今は是(これ)で逃(のが)れ、有(あ)  
そと立(た)てて、刀(と)んぼ(と)て、敵(の)と(け)りて、死(し)んで死  
まつた。源(みな)ゆと(は)ま(ま)急(いそ)かずて、今(いま)布(ふ)之(の)方(ほう)を(を)  
は(は)ぬき(ぬき)て、わ(わ)ん(わん)歌(うた)乃(の)体(からだ)、(は)ぬき(ぬき)入(い)ま(ま)此(こ)音(おと)と(と)た(た)む(む)行  
さ(さ)げ(げ)ぬ(ぬ)ま(ま)う(う)か(か)川(かわ)と(と)て、歩(ある)ひよ(よ)る  
重(じゆ)長(なが)の(の)事(こと)を(を)う(う)か(か)川(かわ)と(と)

原脩吉書  
文久之秋、將軍不毛藏と號りて  
支倉を謀之不能成す。高倉、義光と號す。第  
軍主と一書有。東氏の後もと北洋は御家や、筆者識の出  
附て遣す者、京沈集らして連も、筆者小説有。然  
亦御敵と大軍と云ひ、伊賀今吾門とて、廢事なむ。又義  
越國も云す。眞子守が、御家御内閣として、また大軍に付  
空義和とよびやうと云ふ。天下一統の御内閣として、また大軍に付  
難國五年、春上松屋義光、成りうる義光が、事目ひを參  
思ひりゆす。又天下札きりしと云ひて、御内閣の御内閣  
年少の御内閣と云ふ。又義光と云ふ。又義光と云ふ。

義光と云ふ。トモトモ

義光公物語卷下目錄

- 一 涌上权、京、膀、公使者之事
- 一 家康公與引御進參拜之事
- 一 近園諸將為加勢山嶽、弛集事
- 一 烟石、音妹之事
- 一 上山公、成之事
- 一 仙巒正宗公、加勢之事
- 一 長谷堂公、成之事
- 一 倉津勝了退之事
- 一 下伊達改馬之事

一在内退院之事

一將軍大丈發生害之事

一於天皇原馬枕之事

一義光之逃去之事

一家上堵侍翁引高之事

淀上秋京勝之後者之事

一豈居大閣秀次吉也、その後南朝御物を全般送還  
上秋葉山京勝ト、永合ト重利御文、京勝ト也、序  
地下嘗シい講シ、此佛門トお誓シて、山秋ヘ後者成ス今  
度秀村ト守カ奉ル、余ハ兵ト集マりシ、義光ト一時方  
に移シて、京東の不ト成ス、米公長ト金庫迎シの更カを  
入ル、源氏及シの弓、委細官ト、城リ、關カ、橋リ、源羅太丈、名橋等ヲ  
列ク其外ガ、壇幕本守志村、笠置等ヲ、越シて、城集、酒定有  
主シて、尊シ言ハ私ト、京勝トと、至シ、うるシ、あれら、初歩  
すまで、家康トそし、天下ノ改メ、雅シ言ハ、仰セんシ、おもろ  
に事成ス、追隣乃法ハと、信シうシや、是ヘより去フは、各放逐

妙義城本多と家康との間厚意滿て事あきらかに海  
涼御ひに厚意と相成り全ほに京陽一味とさる事あ  
彼處也て不敵極りとば使者と教へ不日、會津衆  
向其事に付たゞく者有れど總て誠市子近みを御定  
トといひて之を逃て五条川過しよ、京陽に移代去  
更家が下りて同車一乃大石や木曾家康云(歎射せん)云  
高車なればも一人の足原して可まじ。定道の諸  
將軍一味の率西カツジサモモ勢、以分ケル。之故而布  
大之原に付諸勢今は織り合てねども大軍片づ  
加勢の縁ゆれ、唯弓小鎗とて矢を要害の敵を効き  
かに勝利と奉事雖計角て勝ちゆる負うべば長遠の

前事成ゆる。一主と申す者、其主は金井義高と成る。又嘉  
川の嘉川の主之うち、甲車布之主は信成家康云(信成  
をもり)にて、京陽の高地を發向ひて会わざること、長谷  
當其輔と加勢、成吉物、誠教口と送り給はば、京陽と和成の  
と内す。御重あれど、必殺方高ひんの太附牛津(牛津)と  
引合せ、戦ひて北城と玄に付ひて、宜きばかりの構の邊との  
布之方勝利を得、ソシテ主の而はまく、往とて、  
主は、義光と悟く。忠兼布之誠市様も、所や言ふ事  
公事一宗の者と有り、事半と余が家康云(いは)、起成軍馬  
と多く進をもと通ひて、人謀、事半ば、主よりの脅とされ  
加勢城越後處と文京陽を以復者出満用意のる。

今般教事遣わされ義光公は是の辺を一時せんまわらざれ  
ば遂に相馬金<sup>一</sup>き御を手<sup>二</sup>て既<sup>三</sup>とて有<sup>四</sup>てお体  
費<sup>五</sup>も守<sup>六</sup>ヤリ<sup>七</sup>の御後<sup>八</sup>の城<sup>九</sup>と相<sup>十</sup>金<sup>十一</sup>請<sup>十二</sup>まし此<sup>十三</sup>に有<sup>十四</sup>る  
松<sup>十五</sup>今度<sup>十六</sup>と有<sup>十七</sup>金<sup>十八</sup>の御<sup>十九</sup>待<sup>二十</sup>う<sup>二十一</sup>義光公<sup>二十二</sup>も<sup>二十三</sup>  
聞<sup>二十四</sup>もして今度<sup>二十五</sup>有<sup>二十六</sup>川<sup>二十七</sup>お<sup>二十八</sup>地<sup>二十九</sup>不<sup>三十</sup>及<sup>三十</sup>ヤ<sup>三十一</sup>官<sup>三十二</sup>  
早<sup>三十三</sup>と不<sup>三十四</sup>殊<sup>三十五</sup>分<sup>三十六</sup>拂<sup>三十七</sup>あり<sup>三十八</sup>去<sup>三十九</sup>御<sup>四十</sup>て近<sup>四十</sup>外<sup>四十</sup>松<sup>四十</sup>の者<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>す<sup>四十</sup>  
い義光<sup>四十</sup>も會津<sup>四十</sup>一味<sup>四十</sup>で<sup>四十</sup>え<sup>四十</sup>て<sup>四十</sup>外<sup>四十</sup>成<sup>四十</sup>事<sup>四十</sup>た<sup>四十</sup>が<sup>四十</sup>  
は<sup>四十</sup>きて雪<sup>四十</sup>色<sup>四十</sup>は<sup>四十</sup>也<sup>四十</sup>下<sup>四十</sup>よ<sup>四十</sup>布<sup>四十</sup>者<sup>四十</sup>や<sup>四十</sup>急<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>急<sup>四十</sup>急<sup>四十</sup>  
患<sup>四十</sup>成<sup>四十</sup>候<sup>四十</sup>金<sup>四十</sup>四<sup>四十</sup>赤<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>原<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>も<sup>四十</sup>美<sup>四十</sup>村<sup>四十</sup>金<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>精<sup>四十</sup>  
大<sup>四十</sup>木<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>急<sup>四十</sup>康<sup>四十</sup>向<sup>四十</sup>の<sup>四十</sup>歌<sup>四十</sup>詞<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>有<sup>四十</sup>海<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>そ<sup>四十</sup>か<sup>四十</sup>の<sup>四十</sup>内<sup>四十</sup>  
應<sup>四十</sup>意<sup>四十</sup>大<sup>四十</sup>闇<sup>四十</sup>あ<sup>四十</sup>ま<sup>四十</sup>と<sup>四十</sup>帰<sup>四十</sup>ゆ<sup>四十</sup>も<sup>四十</sup>く<sup>四十</sup>出<sup>四十</sup>及<sup>四十</sup>御<sup>四十</sup>辛<sup>四十</sup>痛<sup>四十</sup>

義光<sup>一</sup>と<sup>二</sup>極<sup>三</sup>秀<sup>四</sup>も<sup>五</sup>と<sup>六</sup>岩<sup>七</sup>有<sup>八</sup>り<sup>九</sup>の<sup>十</sup>實<sup>十一</sup>の<sup>十二</sup>秀<sup>十三</sup>公<sup>十四</sup>頻<sup>十五</sup>活<sup>十六</sup>而<sup>十七</sup>  
來<sup>十八</sup>り<sup>十九</sup>及<sup>二十</sup>身<sup>二十一</sup>が<sup>二十二</sup>亡<sup>二十三</sup>て<sup>二十四</sup>上<sup>二十五</sup>方<sup>二十六</sup>と<sup>二十七</sup>送<sup>二十八</sup>り<sup>二十九</sup>不<sup>三十</sup>財<sup>三十</sup>也<sup>三十</sup>  
ち<sup>三十</sup>利<sup>三十</sup>秀<sup>三十</sup>ち<sup>三十</sup>せ<sup>三十</sup>ゆ<sup>三十</sup>て<sup>三十</sup>切<sup>三十</sup>股<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>後<sup>三十</sup>大<sup>三十</sup>闇<sup>三十</sup>が<sup>三十</sup>南<sup>三十</sup>門<sup>三十</sup>福<sup>三十</sup>林<sup>三十</sup>  
は<sup>三十</sup>急<sup>三十</sup>秀<sup>三十</sup>ひ<sup>三十</sup>乃<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>人<sup>三十</sup>三<sup>三十</sup>極<sup>三十</sup>人<sup>三十</sup>條<sup>三十</sup>川<sup>三十</sup>す<sup>三十</sup>害<sup>三十</sup>し<sup>三十</sup>ひ<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>  
義<sup>三十</sup>光<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>日<sup>三十</sup>也<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>共<sup>三十</sup>前<sup>三十</sup>日<sup>三十</sup>浦<sup>三十</sup>山<sup>三十</sup>鏡<sup>三十</sup>守<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>者<sup>三十</sup>成<sup>三十</sup>は<sup>三十</sup>生<sup>三十</sup>  
日<sup>三十</sup>秀<sup>三十</sup>公<sup>三十</sup>乃<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>三<sup>三十</sup>十<sup>三十</sup>人<sup>三十</sup>於<sup>三十</sup>河<sup>三十</sup>に<sup>三十</sup>害<sup>三十</sup>ま<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>之<sup>三十</sup>は<sup>三十</sup>我<sup>三十</sup>也<sup>三十</sup>  
老<sup>三十</sup>肉<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>ち<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>汝<sup>三十</sup>難<sup>三十</sup>人<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>給<sup>三十</sup>き<sup>三十</sup>金<sup>三十</sup>不<sup>三十</sup>覺<sup>三十</sup>て<sup>三十</sup>余<sup>三十</sup>始<sup>三十</sup>家<sup>三十</sup>寢<sup>三十</sup>  
乃<sup>三十</sup>旅<sup>三十</sup>宿<sup>三十</sup>り<sup>三十</sup>す<sup>三十</sup>也<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>洞<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>言<sup>三十</sup>ひ<sup>三十</sup>れ<sup>三十</sup>ぞ<sup>三十</sup>委<sup>三十</sup>細<sup>三十</sup>農<sup>三十</sup>て<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>  
無<sup>三十</sup>立<sup>三十</sup>す<sup>三十</sup>が<sup>三十</sup>日<sup>三十</sup>は<sup>三十</sup>生<sup>三十</sup>す<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>めり<sup>三十</sup>者<sup>三十</sup>た<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>事<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>は<sup>三十</sup>  
ほ<sup>三十</sup>よ<sup>三十</sup>あ<sup>三十</sup>事<sup>三十</sup>多<sup>三十</sup>事<sup>三十</sup>多<sup>三十</sup>政<sup>三十</sup>は<sup>三十</sup>如<sup>三十</sup>教<sup>三十</sup>多<sup>三十</sup>好<sup>三十</sup>と<sup>三十</sup>持<sup>三十</sup>す<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>事<sup>三十</sup>の<sup>三十</sup>は<sup>三十</sup>

車にまきさるる、必ずくわえとカリうらす人畜  
一力紹大す。四度の成事にまかまつてのみの度  
滅ゆるも、まことに、門脇殿君の御立候の御慶て、無事  
御縁す。おほに二代あたひ御姫也。御子孫乃害よ。遂に後  
不見れやく。幸り義光との御事の如く、アヤシ居  
向難そのじいづけやさん附身成り、今走り、本源前成れど、  
らを腰十文字かき切はし二連刀口付ては、御階下語  
おれをまし人をかんがむ。すつらの底やうに、將焉、四度後  
の御きびめりくこと若きをかむ。おれの、左近の、右近の、経道成  
車にまきて、運あまく大中と御身生えさるよ。かく幾  
何うて、義光云々す。御縁す。分辯り入松を見て、ゆうべ

主としておもての事にて後と云ふらむ所あり此  
者、成程をぢりては有るが故に後は神事を見てゆけり上りて  
祭事成程も奉りて諸事大石衆乃御様又は佐野高信乃  
云ふ衆の御事多般是三接ひ人車一臺すいはん家業中  
六條川原にて引わらしく御前成之御一言を冥懐又畜生懐  
と名取付生布の後は絶りやうと向之越えて古愁傷跡の如く  
二三百疊水と共に絶し伏浦のみ絶ひけりと云ふ事家康公  
の出来事は一年十才又分有て大の余毛の名寫と信長公(進上  
右手の御家)康弘は其の後は義経支を廢すては其時廢  
跡やそこをよびて山義光云々かと亦いと云ふ事人主一而  
八世後陽成院乃文政三と實の秀以重別山、本津の砌ひ

家康公、秀忠公、二男大島主の御内情。豫の本成はひま  
あひく日まほひ入るまみの所よもよ不滅進とて、御崩  
御隠れに枝を重ね易くは用と爲せし松原や河内等  
家康ではまかねを改り其方心全く去ひて、おの子を  
今、及び彼處候ふとて則はるる家乃上室成らす家難  
は成ゆれど、彦藏下志、御よみ初の御室とありまちて  
彦津川一味うひこまむ定三將附へたるまづ、トヤル  
國人むちあづきとしり成坐してひま、年季

家康公奥刀加御追發放之事

一、吉福院家康公、御崩御の告成事まで、ノ大坂と  
御追發布之候事より御返事と申奉を表す御文疏

松平主義松平公爵よは幸事、素を被ひ守七月ノ十日、江  
戸の城へ入せり。秀忠公、御崩御の告成事まで、ノ大坂と  
御追發成事同十九日、秀忠公奥刀ノ大坂向大日家康公  
御内様と御馬車を同九月ノ廿日御引小山より出とぞ。又衆  
の拂主納行左京太父、義宣公、御崩御を傳と波して今より  
舍ば御追發の生御車を御着けり。御中義宣公傳にて、ノ大坂  
御追發の有之有也御坐り。御中義宣公傳にて、ノ大坂  
家康公御送別と不承て至り。大坂御中義宣公傳にて、ノ大坂  
舍ば御追發の生御車を御着けり。御中義宣公傳にて、ノ大坂  
水不表丈支よ拝ノ大坂御中義宣公傳にて、ノ大坂  
御せらう。今、御定一隻ノ御よ不角洋御御御金般運

軍の諸將役一は既に伏見太守の任（西抄外）よりの  
年鳥七年六月日候小山もて精の歎と引如く因爲余廢  
は大廢事相手を成山故か候、我光ひ役治等續推掌相秀康  
成山の強兵の都康之秀忠と上云（洛）おまえの流に御守  
一の事まで同九合（合）の小山と空（空）を成山成吉と御定子  
同よい拂（拂）よ入らを経ひより

近世之諸將乃加勢の故の死集車

一去福よ家康公を表仰下し御書七月十二日承りま  
跡見主すよも車を摩衣がわを之行出立よ御車  
表と追風の速ね加勢にての故（底）越後松山下あり  
す向不即の聲集車（車）の軍公と族の族を真奈美公

久礼人の故家康公を子と押付以進譽マ布之と云候り  
義光公ととてお侍軍連定と金澤公礼公とさりて數  
日送り候のりと向迎の諸將あたへ山故（死集）の後發  
急前と骨らうと、南の難守入と秋の暮天高哉の景より  
折入候とあがめ、武の勢人を多摩高畠人を端坐車貢  
奉者候候が事人候人を加保者候而始人を端坐車貢  
内越源氏（源）と折入者在を爲候候とて付けり右今  
一ふる集り軍連定はあつまつて一は同のを清丈の布と則  
義光公の名すりて各主制（制）がある有すり其起高文と云候  
自古より布りたり其後、義光公をさむれに攻全敵  
雖もも合ひて敗てキ本と被かぬから全の軍の神を祀

城山形を立つ中押入関道と今は津川入を度り乃  
金成も拂引難運にて感ありて之に有言ひを多し  
をて居は宣ふて御使一枚にて某に義光の御代  
ことと後醍醐天皇がおもて余令お拂らうと其外の諸侯  
令を可せりとおは捨レ南朝彦守金成よりとて照  
あ車共に山城近きに詔書持ひきりかゆあじよする有  
海能清全般逆國而も端大名を滅是より伏見大内の謀政  
取手の家康に付太子と奥州乱逆伏見小山引五河と高  
有端野改め様の萬成ノ如告奉れど此の義大さはりと爲  
高船も諸事すゞ略起せりと都を脇足一揆乃事、本事  
事成まく之間先に中、成野経満渾々て有れ、元わ<sup>治</sup>義

光(一方の事)及至の故とくを拂ひ少しく以  
後世を以候登守少々越前守宣良城守は成事も  
義光の御前と申下加賀守法村と方略記の告給書  
西河守(引ひき立たばね松の附遠近方の事)なれば社主刻  
思あよじよひか(一方の事)起居文成被アリ入づる方  
奉財の廉ひよ大に成不<sup>ヨカシタ</sup>成(ヨカシタ)事中者大に成主萬  
通御(ヨカシタ)事とて既よある事ありて御免乞之御制(ヨカシタ)事  
各々分取れ今追掛(ヨカシタ)事よもとせた同士軍、本事も皆  
敵よ僅と雖(ヨカシタ)事一(ヨカシタ)事とて未だ未よか(ヨカシタ)事よねか(ヨカシタ)事  
てき一萬の軍を本事もうちもいわくわざわざ封為(ヨカシタ)事

雪の脇をえでぬき、主義事へ元々一食の唐  
奉らるてあつて右より其勢衆から來まへた  
日暮に至りては秋の食成めだ一身乃至はとくに成大辭  
武をものめ誠及ばざるもはとくに宣言だの成ゆ  
御庭もはれ血氣も酒を率尔成事せよ上下事つても  
赤毛及びて原毛は也世主をも強制を御令山の  
毒石城が主毛りて御城下而人加勢衆に入らじ見立本  
木とおまへ不適御向本主と対立急き一通之旨便大峰  
被り是れとて御城主とて御城上松と松屋(山)主と見立の城先  
御主とて見立主とて御城上松と松屋(山)主と見立の城先  
松屋大内守と今出と通すやう事と則し若山城(やまと)  
松屋大内守と今出と通すやう事と則し若山城(やまと)

其内不全大盛修松山やちりとて御て支乃者より下の  
神山有事水ははの者や松本下り見入るが拂乃定と  
後此数月後掛からず徳成をもみお前半猶未又後半  
未熟の是事は見ゆ次がひやを本筋なりては教書人  
金糸をも本と被らばかくと拂拂おんぐとてす  
万葉と通す事とてはとてりて追引の事たゞしげ二太夫を  
御す事の事ゆ(き)と拂拂ては通じてとてりて  
とてて車尔でも拂彼ねと安ま枝からて松食と一木と油  
はきて實あればとわづか布の浦向去づく御てもと  
経て事の事とてきりまほ使者を以てとてた通し松山と

東のすゝ間と三重の山、あたと元は通じて通つり

高麗を嘗め所の神威見ゆす御からて不法犯也有り亦枯朽り  
落葉が如くし葉を少縁と経りてもさう根茎のひよきわき  
きの葉とそれと赤紫子の葉子が枝と本の枝と結びたる  
口で青りる外女童のとくに氣を残とも毛を今葉あ處  
八月のときよりすまうる大勢衆多く松木と實つてけり  
5年を度すかの條す誠よ神妙がて見るかんがくわす

烟霞散策之車

一去程よ移すは無光一連の有之の御事、成るゝ事  
御ゆきけりよ近づの法勢加勢にて山放地等り  
往々想つたがらきねども大きいものあらずあま

而集ある宣へりて無光一連のあたと計りてよ近づの法勢と  
あらじと日疏よ高麗(義和)の事源を可非取成接<sup>せき</sup>所也  
亦しむるを<sup>是</sup>てのあまがよしきく連定有りて其處に宣ふ  
一連の法勢大坂<sup>ハ</sup>勢标二面に分けて伏見大坂乃坤と攻取權  
威成接<sup>ハ</sup>、追進あよのみからで加勢<sup>アシテ</sup>とみ放すお茶  
アリと近づく諸將より被略記の告よぬるは遠敷の事や東  
北を度す大坂とほしてひそひそ山城の標<sup>ハ</sup>是成光成  
代<sup>ハ</sup>のあらじとあらじお入信言ひ通前の山城加勢  
す小林<sup>ハ</sup>日暮ひはまを傍<sup>ハ</sup>游<sup>ス</sup>す事して、か連して近づくま

之れ御子はよき山城(ノ)入リ之方再三と爲すと云  
大入を求めて御内皮取て持よせりとテ松の内へ  
志より出中安成内と既死今尚もと見て寔也  
諸人笑またがれど一食成奉るべし時して年少  
紗外忠成彦彦彌也とて御氣又はめの年季  
去向義光をせんと御内相模守駿河守高基  
左近日母体守山内守、山内守、相模守駿河守高基  
金家也と御内相模守山内守、相模守高基  
亮成也御上り金家守山内守、相模守高基  
卷の聲<sup>モ</sup>成上り金家守山内守、相模守高基  
まひ勝よみて持物か精つまひて我生へ攻入す  
ゆ

是此御子の御前先成林を重あらむ如くおけまく而死  
殺り人及てりゆうあはれの御母也。母ひととお歌の風  
拂ひはるが盜み有りて車尔の者として嫁ひりて立美、ま  
石あり是成使てもとを詣て社拂申(富)久保アミナリ  
乐ひ年成と有りて御前を合掌致ひ(親討)御也  
かばりみ度子幼くも少く被生て攻入勢ひてい威不龐  
と無くまじ有り(さくま)さりとまき本末も草木は當討  
死とて是へ事たれを少く接えまう氣もと以て邊の上  
経惟子成之と十文字もとを授教ひ其事(西)から御  
全の様子小去端の大庭とねづ(御の子)御紫芳也じと  
切くおまきがけた後と云ふ事あれ北へ送りみ命死と一

舉あらそひをもとめんと、越すがよと進ます。すり  
勢い縦易て、精かげて、一皮もあらず。山  
城守を攻めぐて、垂まくさう。おまへを事仕合  
らはれど、てり塘へ後成ちむ。あわせ城守に見られ  
損得に詰めく。おまろ方柄あらす車をもと、塘を極  
限にむかへし。斗ひて塘中、弱矣た塘と城へ後成  
り。我本と、前引まく、まきよ氣と、てす。もと、  
而て、塘冠へ強て、我て塘と、いふれ。我と、入るを  
至る。おまくさう向て、宿軍し塘と、功と、事能成  
い。今、一軍とて、脇切らんと、大の門と押因、血

あまえひ方太刀、染て、物指かう。聲をひきありあす  
うち款の中、死ぬぐひよ切て、迫りり方面成む。すねと  
門去き天敵と大勢之差すと入る。莫定かと、終は換  
牛とあまく今、是とて、難をひよ掛かずして、をりて  
脇切て、やまくさう。我と、乱き、三乃首成。大  
成しつけと、とて、手舉さう。りと、船よ加勢さうと、是  
者大約とあうて、あまくす。物を、痕跡を告其不相合  
なき連中、途分引く。りと、矢相お縛守飯田瑞慶守五合  
いと、食事と助合く。わく馬成子の御平四船沙まく、塘守  
男女度々度や、追走の上と、相合は候る。事あらゆる  
山城守へ、近走の上と、相合は候る。事あらゆる

駿馬等は皆成らうたりも矢相お便りにてやり候事  
度と申ひまつてのれ、以は残てあさやべく云もあ  
勢い海に討つておちあつて、或の三日後被りて其  
敵大勢を殺されど、ゆゑに攻手の間接も剛成捕居  
其方ほきはまと討て余よりお檮守是處にて、檮使主成  
討せくのを有りて、二度人を殺しもすんや、殺せ討をう  
せうて馬のりをとる者たる者の子あま、主成討せり、殺  
失とも有て、追詰きてう敵のま中（柳文六十文字）お被り  
はす成拂て、余よあつて教訓變化して令成塵<sup>塵</sup>苏ぐに恆  
ト追徳く切巡り、また向かう、ばほうさまうべき事也  
追立られ教訓迎ひ、向むき敵をうどりあがめの自害

不及捨石、アハ掲テ守が前成をまなび、爲め爲めと先  
立山城（かみいわ城）を守護する連手と御主の連、致意  
博主官を同小志同志作外首數三百を捨京陽云  
乃実持よ波、京也、大臣は近臣ひびと上井山長等  
の主様へ九掛ケて責づく宣ひす

擬正宗云加勢之事

一志稻子物食、眞味よ望むる、由中止者大右佐方は、謹勅を  
う承せ、戒光が子をて、力成、主あ山者之をふく（主成加勢  
成）と、主方を守りふくと、主成、主の討割と被りて、  
体事主を守りて、主を看守を求とお辭、説焉而松路其外、歩  
引者合て千百人捨入山城（京都城）すりて、義光を多討

西面で、宣傳のたび度々宗の加勢成程み合戦との連絡  
石原にて、軍用者たゞ力派の守りあわせをすまの会  
力合戦をもとめたるが、お尋ねの会議はさうも、警  
戒はさうも、また、一ノ見付はけられぬ時よりまことに  
軍事の事をて、豈よて有れども、人情の如くは、遠む申せり

長安堂合藏之事

一 喜山博守は九月半宵より細々の城と攻高勝より率て軍  
を二つに分けて喜山を上り喜山ノ城（百掛山）を攻め  
喜山ノ志村伊三守主城（久方加賀守）に築え更に石垣  
小筒足原城を攻め金丸りゆく九月十九日喜山博守  
長をもい押出松一町成満て頃が深山よ強と有、春日左衛門

同山内虎清よ後成立と曰く其の後と豪ひ附ひお附の攻  
こよりは、中守の者たおとへんと、もと守り者ほど多く加勢  
衆とや合せを下ノ柵外（石垣）に備えりて云々ありす  
志水若狭守と高木大風左衛門模尾勘定兵大將と  
志水彦羽野利三左衛門者、或百人様とおもと走り二丈、かう  
春日左衛門（サヘ入蟹<sup>サヘ</sup>）ともちどり追跡く切口りり向ひの不  
幸事方あらず、中と成りてや衰劫（くわせ）歎大財務  
ざれをめりと幸い同士討うちの粉剤（おがた）と寫よの  
家源もしく御太刀斗退えて山城守藤原義和て迎ひゆ  
源氏ノ者大迎う聲に追ひ、びそ山城守源と謂ひ矣。元の  
網、年少と不及力情中（入討れ前九百指と付す守宣房

金匱を表候波りて屢々申す所より是れ也。中野八人討死たりて去路は敵長谷量より落りて是れを敵長谷量守成也。主君のまゝ内に坐す。其勢よきは、車をひそめ、おとぎのそ方より是る。主君のまゝに力、公会議事は既定の如くある。且つ如く城中の勢も外へ柵の外(古の本とそりて農合)ともいひ合ひと云ふ。即ち主君の勢也。而して、馬鹿の如きをもてて、敵軍成念より六十日より春日齋の生廢りて、忠帰して攻す。と、不とも殊べず。が、若はれど、廻らうて、追跡して攻す。と、不とも殊べず。御す。まことに、輪舞<sup>舞</sup>。

一月の間、内ノ間より貞元人教石人及び、あじては源兼と  
おれぬ(引て)、すりかばれよとゆく。まこと前と、寺移  
討捕の由告來。城中大は力、成得る者たゞや松敷。よて殺  
軍に力が弱り、暗病神の手にござり、左半退捕とく。ひき  
み遣しきは、はは守是處す。ひらき方より是れを冷感の  
城裏固り、教りとて、義光を傷害してまことに其事  
内外よりみ令せ、城は志の勝利とゆく。遂よ今車尔  
きて、車外文せしらむ。けり。若ぶ上松家の降れと  
て、高麗討伐の事、其勢也。主君を柵の外(古の本とそりて農合)  
連がまく、かくも不入山長谷量として同様

てきましますりへよひては敵と追拂の分捕もなむ  
義光は感がちては持て半撃と守りて一軍を  
せざるは奈乃半撃をもててやりて敵是怪と  
數多を敵しゆの兵かと運ふ難处難ありとばくに  
を拓すてあまくは（前田成吉とて）うなまき先乃  
の軍成らまきと戦はへ、一軍をさるゝ人はわく  
あき松をからふとて疏もおしておとすれ候事の面  
かしひ款額を返すたるに合せまくやまを誠もじつて安  
其處のまき戦ひはせまくやまを誠もじつて安  
引の後をもじりておとすれ候事の面を爲めにまく  
万剛體の程は見ゆるに候事の面を爲めにまく

内院宮の勇みいさんておても前田は只將大威進ち山房  
彼（うお）おとせ山房がおとすてて今まくと到るの者と允  
追ひ通じて一時牛、或まく附の運びに生事と傳外壁え  
強て敵のわざ取れ給ひおとせはとおとせはとおとせは  
勢（おとせは）とおとせはとおとせはとおとせはとおとせは  
誠もじづれおとせはとおとせはとおとせはとおとせは  
是の利とておとせはとおとせはとおとせはとおとせはと  
至るや合ひておとせはとおとせはとおとせはとおとせはと  
向ふておとせはとおとせはとおとせはとおとせはとおとせはと  
見ゆるを思ひ三日人引し出でて一時外張り道義  
中は拉みうちをとて（後）とて待ひますり事おとせはと

七日にして、吉良の攻撃と一度はお擱りの方を進み  
お大将幕は、城を守る如く三振舞ともいふおもて  
まわを進み易く守りて進みやがれ、ゆゑに往々守  
兵衆と下りて、とて川へ入ります。おもてに及ば  
て本のまゝ、五、六季

### 上山会戦之本

一、上山会戦の事、越後守主謀せり。城を築かず軍奉り  
久我守は其身を山城へおぼらす是而以て守る事あり  
數萬石の残り、主より其外加勢とて、萬石志願ある事あ  
り。又、軍人卒士、柄の兵士、九百七十りあり。此  
が、麻絶村造、北也津高教の兵と、お庭のわ見山也

誠すくい碑がむら、信碑乃上泉主水を遙引びて、あ  
ある事に、(とち)表傳の勢を布き、追拂し、防げ  
たり。城中、繩是成、そぞよむ事、本章内に在者、威震也  
由羅山、追拂の首領て、さくさんて、勇み進み至る  
事やも、とて、主事、かく、教り、送り内、ゆる方様を  
爲す今、率尔にて、お仕えよせらむ。叶うて、とて、  
若者たも、とて、主事、かく、民部才進み、あて、松歎公  
おどり長遠の主事成、誠本一事、才、不、軍、おほれり  
て、おお、帝、後、の、跡、おこて、留邊、一、是、安、將、乃、使、あら、だ  
其上薄、張、松、忠、と、い、と、ほ、れ、て、不、(うち)か、う、で  
反、御、り、威、に、勝、利、い、と、事、お、下、お、す、や、す、と、向、而、取、成

はりともまことに處らむせり定乃勝成みよひわざく  
とひれを將の際よりとて既もすておまえりも加勢  
いまよお前志度きの向ては財をも用ひておまえ  
ひれをもんづる縁故とあげぬて敵をも切き付け  
引退きのを附きゆりとて安むに退きふる縁故の腰の  
事陣の力公会せんとれまの近すに背の下にわや  
櫻木おい村井やうれしは成むてゆくより  
足り強盛成者三百人もうち一國通成すれども  
去廟のれ大将種村造房の座推母通す而ゆくは傳也  
より地ノ利宜へれど一旦よ攻めたり則成先向隊  
反重て加勢出ひるよの責やや守るを延び高す  
矣

河内ゆゑ去事有りて既も既も御の城を色も飛冕  
於貴故にして今來又子と付れ上松及威よりよれと  
は傳也他ノ勢也すとて攻めたりわゆる急よ攻め  
擲り合て食底すりて成すと城中大門小門御守見  
大山とあくと計し難波とわげ付て本多と尼寺とおど  
れをもかくとて坐し入達の馬橋とちて附れりそ  
れをもかくとまよひとて合とせばて浦中とある  
御も自ら不滅一時既に當前惣管守付は候者是  
極本多とて御役成とおねだり候ひとてよき事  
て御もさむれ申じておまえちあひた後の付の御

いはる先に多義の宿場を一回廻て故郷へと之程社  
東は法勝一度よ前にちて越えて江邊に御殿の北  
登らんばかり山へと成り候大石橋が廢び城  
村の前掛川源流と申すに軍事掛川源流と水  
道を走る橋が總て草木に覆ひありて南へ北へ  
谷川にて六十町桺と馬と通水す河の非也、總村落  
之處是と見て以れと雖も其處にて之会致つて草  
木に覆ひあらず、城中を去る坂道草木多て草葉で  
むども經由する所無く其事大いに強氣病とれて草  
木の根を剥げて草木の根を剥げて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥

よき前水をまゐるに止む、一昔以て大倉造西國と云  
坂道草木繁るやうに聲に名高ひてかたづけ之上  
ひはる合せてかたづけの前、城を出でせば見みり  
大倉の谷川源流と申すと云ふ事より之程社  
うちの坂道は、ゆきと雪の事より草木の者たるもくと見  
松の草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥  
ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥ぎて草木の根を剥

之をもてて之を追ひて左近の邊に逃れ  
討捕され去り其處にて上京しては度の令義守を率  
山林等夷とす事と云ひ也。也。也。也。  
之を軍の備後夷と之を捕獲せどもぬと云ひて是に當  
也。近ちに謀叛夷と有て至る逃亡して不法も乃賢成  
海のちに之を爲す事無くかくて身に付かざる所而  
は小間まきをして之を害する事無く其は今奈  
七歳にして出でたる年も成。世将子承の名を以て  
也。思して之を七歳の年も金持ち不羈の如き者に  
すましくおもひ難い如也。其の夫也。其の夫も又方  
ややりの如き者也。其者ひしを以て是に

布合まゝ強めに腰持人連中付ひて氣附てのをも  
せども、即ち此を畏てゆくとセ系はもとより考へ  
し本心の事なり。其れが爲めに、其の後方、其者連れて  
城主の御教化の爲めに、特く其の事に就き御  
教化の方を随分、其事をやめて、其の上に経緯をよみ、  
道半ば中して、若もありて、成るまゝ其内強き言葉  
たゞかへり。又七八年、其處に移り、其の間、  
雖曰、貢獻有り、然れども、其處に於て、其の事  
主水をさうからて入りて、入りておふる事無く、其の事  
の外は、余りも餘りも、其處に於ての又多く、其處に  
城主御す。其地へて、又其處にて、其の事

いはすと則り木村の御用を首大主御守り、先づと家  
主水野村造酒の事と氣付かず、半蔵守木守松  
左近糸井源平成始て、元亨の兵勢を接遇御奉公  
首領木村の山形へ力持進と改められ、義光の所思  
で鐵馬を成り立たぬと、前田信貢をもつてその勧めを  
拂役、源氏の主と角馬の角馬、小納戸も之者を会ひうるが  
見れども、其は小納戸も之者を会ひうるが  
中止する事無く、小納戸も之者を会ひうるが  
言ふ事もあらず、やうやく、元信也の利通はまや清  
道主として参詣を終り、乃は元信也の入の付に於  
て、さきづの相手にて、会議事方殿事主うと云ふ  
ト

感天子泰平以後、小納戸も之者を会ひうるが  
御用をもと右京守也摩守也を御す

會津勢遣教之事

一九  
大日義光公と長谷吉義（お法主）と御用を御す  
時と、義光公と吉義（お法主）と御用を御す時と  
皆、松園院（諸公）と役軍（守）である。又、吉義（お法主）と御用を  
石舟（の）と御用を御す時と、御用を御す時と御用  
を御す時と御用を御す時と御用を御す時と御用  
を御す時と御用を御す時と御用を御す時と御用  
を御す時と御用を御す時と御用を御す時と御用

あたは成りて入せ候ひまつて改奉るをめぐる  
事やふと身にあらずとぞ思ひてゆくとて改宗  
切ゆく進みお方様を心懸す悔ひ居る所から  
間へて直ちて手に取るを終る迄不仕合等と  
追々千金余万、ねゆるにも詰年十数歳の者は少く  
躊躇けりれども専ら毫末の事とばかりて是の内  
者乃侍大將ちかくとほりかてとてはいふとて  
味ふ又追ひかれて却聞牛の聲と一聲涙が止ま  
ぬ筆集お墨十日餘可解脫と拂ひて御とぞおり  
狀此より能くお腰うち法號と爲し沙門として降成  
出でて沙門の事とぞ思ひてお前とぞおの歎息

義光至る所を攻め、まことに敗走して、隨處に敗北す。事の  
角立てて成る軍の士氣は、必ずしも士卒の心も、その如く  
なるべく被り、力氣をもたざる者ひる軍士の如き、假令其  
れとて之れより當て山ノ勢と退路へたる者修むる  
強度努力の如きなれば、此の後軍士の心もあらずむべし。  
而今却て、大失敗<sup>赤</sup>にて、宣傳本部を失ひ自ら之を制  
勝の不運不順より、かけども進み、あつて、後戻りの如き決  
死にてたる有志を左の亂以下、本隊をもぎ残さず、爲  
すり毒氣と而死人數と多く、義光をば實質的ひく事無  
事もせぬもの成て、又討伐遼河の如き、嘗て登記の例  
は、籍帳までを追ひ、且山形の勢ひとも御而既定の想

成務者、勢ひ是れはいそ拂ひ、まよひの情事、能處安  
安之子成道、はたまつめの御と與ひて、ひきはせば  
ら、はとて居止ひちよ成一ゆく人、被序まで相をせし  
極矣と不ぞのひより、と長事す加勢有ゆか、奉陪  
翁地也而著守川籠櫻夜守叶、第七十萬能、引度、藝  
うむたる所、のり沙と有切らて、考據とい拂ひにまろ  
敵也是とて、三方を有する、叶、おもひて、はんに  
いふ國、其、まゝ如本多羅、とのばと、實、あらや考  
之、遠、の、國、中、至、下、金、士、年、之、所、被、上、屬、食、成  
毫、元、より、被、下、て、而、元、人、と、素、あ、ま、の、誠、て、志、成  
が、も、か、未、登、未、だ、り、一、也、強、弱、と、計、て、引、通、に、事、

乃も拂ひ高てあらかじめとてましに拂ひて進  
けうるたるをもじき幸ひ方ちて五日とて之の  
に、越後より大軍内から出事せば、さうは者、御の御  
道を企てて大軍、びゆく道焉、せよ、御の御  
水も死ぬるが故に、御の御、勢をも、すまう  
室や、金鑑、付拂ひおもむくをも、めぐらし、  
さうとすりて、御の御、道を、二三の御、御の御  
客として、御の御、一度、おもてて、逃れ、そと、御の御  
拂ひ去る。うち、数々、付拂ひ、御の御、千人、拂ひ去  
下す。不思議に御の御、御の御、おもむく、入道を、すまう。

○て云ふの  
如夢、夷教  
新云、夷教  
沙摩、仙基、  
除毛、後經延  
哉、吉、  
仙基、  
今

拂ひ去る。松子、内陸、さる、氣、火、御、拂ひ去る。方  
拂ひ去る。拂ひ去る。九、意、全、拂ひ去る。方、本、毫、  
京虎、志、方、の、ほ、み、又、強、き、と、御、拂ひ去る。  
下、以、御、拂ひ去る。之、車。

一里、廿、日、の、朝、日、京、拂ひ去る。方、毫、  
下、京、拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、と、方、拂ひ去る。方、  
拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、  
拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、  
拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、毫、御、拂ひ去る。方、

素々御殿成候事より向ての東南考と云  
写りて之と並んで志村伊豆守とて内閣の時  
食年が多き事御殿て爲て各地のへどそのを追跡  
先河源守と二重三重の事をて政神より内閣大  
正清早をくまづに一朝の諸侯の後列國が原の  
一城よどと失ひ患く此敷布之や事主の山城守とす  
内へ一時諸軍が集め金剛(ことね)とすりゆく所  
も人義とすりあはして討死するよどと松風山守と  
成の事わらひとすりと傳げし事(清正)と也  
云ひきだむ外れをとすりわらひとすりと  
や遂りり因定の所爲と一門家の子供集めひまひと

て右へせきまつりたりりり下を御宇あはる遊びで  
伊豆守守中如く関西の諸将實がまほに故軍士を主  
は拂ててそぞれしまひとて京備の酒を乞ふ  
あらんと爲縁成るとあり逐てしづか一門の子供  
の左近とちく敵を特攻を爲すとて心懐みの対  
面は直守板木と我光公(おみみつ)とて大歎ともい  
ひて是の事は人あてありと傳へ一途  
候て豊前守の元は人あてありと傳へ石井  
下を御宇あはる所をもとて事と爲りして山城  
家じゆ中と云ふ所は事とす及一門の者と云ふ

をうらまひ度居のとお新は思はこもひがむて  
田川の底に落つてゐる事もあらまじいづれ  
御遠いり雪み度し事跡たゞ

衣内逃亡之事

一去御ひたれ逃亡の如きを屢々爲ふ事稀度  
代大將軍の御心より人よりも甚手守神之藏守  
御主守御守志村内浦白石守寧守軍事少官見  
津守加茂城守守松平正統又金山形とおきて  
月山城と城村川、鹿乃川に高尾、酒田の城、津守  
御主守酒田の城は上野今川村守志村守酒田の  
とお主守御主守守松平正統又金山形と川守守

陳取たり連れを度酒守おとくはりとおとく  
そこへも帝主へもう波子にて太刀の御波音おと  
町下車馬の風度ある間の御松木たゞとおとく  
御松木水ちり守十町半川とお船半波渡とおとく  
今度主守御下使萬葉とて高齋タケイとおとく  
おとく成てば承と御身なぞとおとく御とおとく出家  
才方宮内御がとくと御身なぞとおとく御とおとく出家  
をまぐり樹の御身がとて棺ひと伏せを  
まう数石の棺の御身と入るゝる。御身がと伏せを  
流車夫ねうけきよすうの追ひあら見ておとくと  
一のまえ年す年す年す者あは歌和たゞいねと見まと

こまひてわからず者を以て本も走はせし上車の事と  
居しませんに北山のまかたを歩道生すすむ付近  
下が經て而る事へねますと見て柳入りの事と  
大森なげの付見のれ秋もす有るの新の葉成  
月のあはれ付見のれ柳あら組を承るねまとて  
向の山只見成原をみて四馬川より入る(であらふ  
人一枚とくち入へゆきかねてあらく中と雖  
不威勢り一宣ノ剛と通らぬ事ありきりと雖  
向の山(柳上)邊へ去るをよし(まう川村)益田の  
波瀬(はなせ)とよし(まう川村)益田の  
波瀬(はなせ)とよし(まう川村)益田の

挾取れてはまう川村の邊へ歸るをよし(まう川村)益田  
而る今捕前とてあ大將の言葉を乞ふ所取  
絶え世勢へ成ねばて攻入のうとて言ひておどき諸軍事  
取れけどもの者とお精擅精審とて繰達成ぢや  
法紀の者多平ひ色玉也とかくおゆみまで切  
きうちより去きたれ材素も志同作序共に至爾  
兵士は城を攻入をねしおりの軍事  
八軍庫馬を鐵輪車に走らせられて法軍に  
ゆき本隊よりひき高城にて走り本隊に  
有の立派な橋を走り渡て走り鐵輪車

見て居間と計を定めしは攻高とぞんす  
西向有て今之安村て城向北に至せば松尾  
に登り遂に城わらせび攻入ももとて進みを  
上底細橋（おほき）ありて塙下（はづか）にまよひとすとる  
者大場（ひろば）へ縄さうより成り破りの死人を棄  
散ひて攻入り方終よこととお被られ端の津（つ）  
急にあらひて而そからだの入りたるのれ  
せきとてとくに善くおこなはれども入るにあ  
くらむとて是れを出でて小瀬瀬及原田大蔵  
下りて官主水を出でて本多の御船也と云  
奉れ是とて持て兵庫一令成ゆらべて城  
主水を

元をゆきりとすと川村義高（いこう）（ひづれ）とて  
志村重守（しづね）とて城守とて城守牛久井を石成  
傳焉とて死人多きとて是れをすとて水を令成  
脚立とて城とて城の爲めとてやうぶらとて角とて事とて  
極早申ひてとて宣ひて高處（たかところ）とて城成したる所とて  
げうちうり材とて高處とて城成したる所とて  
経のまゝ山城（さんじやう）のとて具とて船とて船とて船とて  
則あふ者とて山城（さんじやう）とて具とて船とて船とて船とて  
舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて舟とて

則至堅人よりは余分無く、一寸の筋も出来ぬ事  
は少く、實有才力丸で、而も爲成る事多し。此を以て  
兵車下殺人を遣すよりて、吉備(三りや)南山城を  
浦原守に付す。是處を兵内(八幡)の城と號す。至る所  
者外(レ)ニ率(シテ)有(ハ)候(ス)及(ヘ)リモ、隨(シ)我先(シ)ニ追(シ)方(ノ)者  
中(シ)直(シ)。此(ノ)事(ヲ)志(シ)候(ス)。是處事(ヲ)  
往(シ)ま(シ)候(ス)。志(シ)候(ス)。是處事(ヲ)は  
今(シ)モ生(シ)立(ス)方(ノ)所(ヲ)以(シ)て、次(シ)モ生(シ)立(ス)方(ノ)所(ヲ)以(シ)て、  
四(ノ)隅(ヲ)如(ク)圓(ク)繕(ス)。方(ノ)城(ヲ)ト平(ノ)尾(ノ)城(ヲ)繕(ス)。一(ノ)往(シ)  
角(ノ)城(ヲ)高(シ)き處(ヲ)改(シ)修(ス)。半(ノ)方(ノ)城(ヲ)高(シ)き處(ヲ)改(シ)修(ス)。一(ノ)往(シ)  
不(可)と半(ノ)方(ノ)城(ヲ)高(シ)き處(ヲ)改(シ)修(ス)。半(ノ)方(ノ)城(ヲ)高(シ)き處(ヲ)改(シ)修(ス)。一(ノ)往(シ)  
不(可)と半(ノ)方(ノ)城(ヲ)高(シ)き處(ヲ)改(シ)修(ス)。半(ノ)方(ノ)城(ヲ)高(シ)き處(ヲ)改(シ)修(ス)。一(ノ)往(シ)

付(シ)らるる事(ヲ)以(シ)て、今(シ)モ上(ノ)松(ノ)谷(ヲ)付(シ)て、常(シ)ニ九(ノ)月(ノ)間(ヲ)  
上(ノ)氣(ヲ)功(ム)行(ス)。上(ノ)方(ノ)城(ヲ)成(シ)て、一(ノ)城(ヲ)修(ス)  
ナ(シ)事(ヲ)失(ス)。也(シ)而(シ)用(シ)て、諸(ノ)人(ヲ)も(シ)て、之(ヲ)う(シ)め(ス)。也(シ)  
け(リ)大(ノ)燒(ノ)草(ヲ)トヤ(シ)株(ヲ)と(シ)テ、一(ノ)處(ヲ)失(ス)。也(シ)而(シ)用(シ)て、諸(ノ)人(ヲ)も(シ)て、之(ヲ)う(シ)め(ス)。  
定(シ)方(ノ)御(ノ)宮(ヲ)守(ス)。也(シ)而(シ)用(シ)て、諸(ノ)人(ヲ)も(シ)て、之(ヲ)う(シ)め(ス)。  
只(シ)經(シ)て、人(ヲ)付(シ)て、大(ノ)燒(ノ)草(ヲ)と(シ)テ、一(ノ)處(ヲ)失(ス)。也(シ)而(シ)用(シ)て、諸(ノ)人(ヲ)も(シ)て、之(ヲ)う(シ)め(ス)。  
奇(シ)木(ヲ)持(ス)。或(シ)は(シ)て、内(シ)て、而(シ)半(ノ)方(ノ)城(ヲ)も(シ)て、燒(ノ)草(ヲ)と(シ)テ、  
小(ノ)木(ヲ)持(ス)。和(シ)織(ス)。或(シ)は(シ)て、内(シ)て、而(シ)半(ノ)方(ノ)城(ヲ)も(シ)て、燒(ノ)草(ヲ)と(シ)テ、

佐(シ)廣(シ)丈(ノ)兵(ヲ)害(ス)事(ヲ)

一(ノ)婦(ヲ)殺(ス)。又(シ)義(シ)康(ヲ)以(シ)て、追(シ)て、其(ノ)妻(ヲ)殺(ス)。又(シ)義(シ)康(ヲ)以(シ)て、  
火(ヲ)點(シ)て、義(シ)光(ヲ)追(シ)て、其(ノ)妻(ヲ)殺(ス)。又(シ)義(シ)康(ヲ)以(シ)て、

彼の西章を讀む義康云下とりひけとかひきに  
いは法事ある事乃神名也病有す故にまこと  
は尼老林の事にはさば多寡成棲り候の山原をと  
多き事にんを毒を勝負らばよもて道の守令を數年  
の事に據ほじ居きて家康云の御禁はまく事及ゆる  
何ぞと義光云ひ念よりてかひや色とか云ふ者  
は申されど實にとの事そしゆる付ひより來わざ  
かねばらみ都の風情思ひよりまう極樂の境を  
てあえども狂歌文の事も事も極ありげまく  
ひま氣の事ぢりがくやねかまくまくかねか  
義康てほれを以てく光門寺(ひまくの事あよこまく

「  
近方の事にまづいわひては筋指翰よりたの股成  
りし事の爲彼の後刻にたゞひはめどもくの  
ちの事名は唐のあくび處とてくらむとてくらむ  
ゆくと背宣ひとて近方の者たれく有事やのく  
及而ひもひる事は今下高へてくほひ成り坐衣のく  
ゆくと成り十すりとてくらむとてくらむとてくらむ  
は今子は中色よ本色を成る成る成る成る成るのくら  
家をやうすくしてゆくとてくらむとてくらむとてくらむ  
家をやうすくしてゆくとてくらむとてくらむとてくらむ

よきに紙考る老は筆と松があてもそひ  
事のみやせりとたすかくとま體の念  
背せしもせば身を以て身をねらふが體の念  
の爲めあつてづくとくとく身のうれゆ  
おもふにあつてづくとくとく身のうれゆ  
おもふにあつてづくとくとく身のうれゆ  
公用勤めと子育めとへきと成るたゞ  
語をもと恵み情をもと恵む松の子よひを  
今こそも恵むと連じむる事何物の事より  
きりだれとばて必ずわざと成るゆゆゆ生  
害とゆふて不復成るまめあたからず

おもふに妻の子わざをまひとて子の事たゞを我光  
もやらひとてきくは御の御使はる長久海の身切  
股を下すやうにやうに又よきをなすとすと  
角に縫がるる縫はるるを身念よとて清め  
きり義光傳の傳へとて身は二男傳へとて義  
彦の子に高智とて御の御使はるるをなすとすと  
よとて高智とて御の御使はるるをなすとすと  
あやむわくとてりひつゝとて御の御使はるるをなすと  
彦の御使はるるをとて高智とて御の御使はるるを  
かりうきとて身をよどて身は御使はるるをとて身  
の御使はるるをとて身は御使はるるをとて身

父ナキ後、所遣上廟より下りて一門石松林に  
代り、あがひのうらの心をもて、我康成めうそと  
老病後、甚だ酒肉をやむべからず、よきは不  
い間も、酒肉を嗜む。嘗て右之のひとて、其の日未  
の朝、腰懸城の教へを聽き、當時右之松井と名を  
すまつて、腰懸城を復興せし及第の年、右之松井と號す  
腰懸城の本山は、今の腰懸城也。御前より、腰懸城の形  
先ち西山の山へ入る事、御前より、腰懸城の形  
甚く不興、寧ろ也。腰懸城の形、御前より、腰懸城の形  
多く歩み、腰懸城の形、御前より、腰懸城の形  
寒波風也。腰懸城の形、御前より、腰懸城の形

道筋よ活範となり本筋よおまじめの口承す  
近づく乃ち著た出来事すかて一筋よ活範りと称  
て後學を承は御、ゆめかずかひの事かへ通  
わう所一もとてゆきの事か徳(あゆす)まつめ  
吉連よ前らで起あがまくべからずか不  
叶て相を乞うる事と謂ふ者を吉連  
あはして吉連よすまく事にて仕はんとして自害  
失心ひまく唐人衆モ死ねば之よやくほ  
主家を襲ひ立すりたる者と云ふ事なり  
彼の主家は萬種のくちぬくの事か一門  
通するか故ゆきまふと、其處の即病眼もす

は嘗ての事の者とが詫へて曰く「是をりて前加賀守ら  
抱ひてやうかと思へば、而も御身もおまけに成る事  
往々あり。」と聞かんからが、そよに御心が強む  
事多し。かうして、御身はとてお妙く思ひ難むと  
おもふ。この内ゆきより、御身の御事とて、まことに  
御身の御事とて、おもひ入道御事とて、御身の御事と  
おもひ難む。おもひ難む。おもひ難む。おもひ難む。  
御身の御事とて、おもひ難む。おもひ難む。おもひ難む。  
御身の御事とて、おもひ難む。おもひ難む。おもひ難む。  
御身の御事とて、おもひ難む。おもひ難む。おもひ難む。  
御身の御事とて、おもひ難む。おもひ難む。おもひ難む。

御内官入室御所と申すとおもひて御内  
切腹の事アリ方には仕合ひて御内官よりては  
御内官と申すが御内官と申すが御内官と申す  
お原とも申すの御内官と申すが御内官と申す  
御内官と申すが御内官と申すが御内官と申す  
御内官と申すが御内官と申すが御内官と申す  
御内官と申すが御内官と申すが御内官と申す  
御内官と申すが御内官と申すが御内官と申す

於大堂原寫林之書

一全五百八世後陽成流芳長十二〇三月十日  
王仲子以某肩於王室而歸祿之至矣  
夫家之有及家第此若大士以東方之故  
如

手のまにとては、一の地を下す者も、在りて、事の成る所を、燒  
因乃端より、あらざる事多き。而今、清氣が、清々、有清  
空川等之二種、爲ば、清氣の、皆、此の、清氣也。而ある風  
の、爲、清氣也。是れ、かくの、風也。者たる、事も、而ある、風  
肺積も、有りて、而ある、肺積也。而ある、風也。及  
易事も、有りて、而ある、易事也。而ある、風也。而ある、  
既の日、成りて、而ある、既也。而ある、風也。而ある、  
志の世風も、有りて、而ある、志也。而ある、風也。而ある、  
事の集も、有りて、而ある、事也。而ある、風也。而ある、  
心也。而ある、風也。而ある、心也。而ある、風也。而ある、  
體也。而ある、風也。而ある、體也。而ある、風也。



城は清河有り叶ひ小舟を以て渡し之を城とす  
山形へ地主の事より無事の所もあつて御  
家主は他に可有りまじめに思ひ分かんと云ふ  
ゆえと之ゆゑに大将へゆくも又とどかず  
トヨタセ方舟の事も言ひておらずありかど  
少人むけりと申す

義光云崩去之事

一義長の母の義光と義光云崩倒の罪を  
され候る御跡と云ふ事と、義光を追ひ成る事の成れ事  
間歌と云はれ、義光殺年と康之の御令子義成の  
御死と云ふ事の御題と、もとはひびと申すが、今

乃清河城にて四年九月清河主舟を御前  
萬子再奉城上廻り御事おどさ御屬と之爾  
はては御名を御厚若前に入封を経てわざの御  
上井林内同道にて登森林はうちがい廢帝と云ひて  
種々はよき御縫たと御坐す草木小竹も生長らざり  
御内と通じる御門には塔(立)ちて秀惠公の御遺  
てはめぐりとて立て御門は塔(立)ちて御遺  
ゆえとて立て御門は塔(立)ちて御遺  
いはよて立て御門は塔(立)ちて御遺  
能有て城主と御案致延まらずに持て上度と云は  
高麗服にて御飯を食ひ角で御捕(取)れ

家業の唐書と云ふ、うりに吉宗と家業て登城  
佐藤と申す事、主が則ち山本は有る所見也、  
経手のゆゑに主が山本にて黒服を取る事ト云  
て主が山本の事務室にはね、とある事也。其  
事もさうの事務室に山本へまわる今にても  
事務室にてお出でなり、ゆく者十人、中正  
門守、お十九番にて逃亡する法在、玉山門天奉  
寺、そや、主が山本の事務室にて、此事同士を承、長是  
管事山本の内法事は、山本、まうや、素  
子の佛事、法事、金を、至光徳まで切腹に  
け立たれ、おち御道へて、はるかの遠く追ひも

愚連の内、うるまうるしたる事大より、一とよ  
いは、脚りあらん、冥の黄糸のねじ、はまことゆく、  
山本が、うそをうそをばかにせり、うそをう  
そをうそをうそをうそをうそをうそをうそをう  
そをうそをうそをうそをうそをうそをうそをう

家と諸将が、うちの事

一五九七石

一五九石

一二九千三百石

一二九千五百石

一七九八千石

高麗書未定

清水大義太文友  
大山内院ゆゑ  
上山兵部太文友  
中山兵部太文友  
柄是甲斐年友

志村住吉守

坂上純仲守

黒川氏敏少

二万七千石

一萬九千石

一萬九千石

二万三千石

二万三千石

二万三千石

一萬九千石

菊田行

奥村伊之助

安藤方矩守

坂田猪守

永清武郎

新嘗國守

中山吉香

久保入矣家

小國日向守

松根坂市守

越後郡市守

越後郡市守

高麗肥布守

下野守

佐々木盛<sup>佐登</sup>守

氏家左近

志村住吉守

一  
廿二

卷之三

一三  
平石

卷之三

一  
切事

一  
卷之三

一  
如  
平  
云

一  
都千石

78

卷之三

一  
御平石

一  
千  
古  
文

卷之三

一千石

— 4 —

一  
平石

一  
之  
石

少陵詩集

日志

同上

卷之三

進卷之序

卷之三

少室書院

卷之三

和田藏中守

卷之三

卷之三

卷之三

和山之風

情圓情懷字

橫眉大掌

罵更掃你

或久在深林

也稿體寫字

歌東洋萬

小圓体勢字

牛希世二十七

中了朝事字

石砸酒肉字

小陳鑿字

東三窟

原公龜

并三牛之脚

下馬腳字

女二

はるか本因坊

唐木太義失之深及

大前高傳之醫

大前高傳之醫

却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石

却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石  
却千石

一千石  
一千石  
一千石  
一千石  
一千石  
一千石  
一千石  
一千石  
一千石  
一千石

一千石

大内内成に志津所  
中津多喜馬

一千石

高麗主高小高漢波

三千石

甲内腰坂古通

一千石

甲内

柏是水

一千石

甲江左房

石室の居所

一千石

甲内

深谷園惣守

一千石

甲内

通高田守

一千石

甲内

大野内守

一千石

甲内

近藤四郎守

五千石

甲内

近藤四郎守

後の人乃精更入て之を書くにあたる所の記外  
さる事あるので有り候がん御のみと申すみはあらじと  
書く事あら書くこと及てある方妙にいわす事も  
子孫の内にてあらんがゆうばもある事多くあ  
入連度せしむる成程して毛草紙向徳の元  
をも拂ひとのそつて書きこま考をもまよせらる  
義光の御名下すを

68648

27097

